

矢口・唐沢南遺跡

1994

塩尻市教育委員会

矢口・唐沢南遺跡

塩尻市教育委員会



矢口遺跡 調査区全景



▲ SK-111 出土土器



◀ 15住 出土土器



▲ 4・6号住居跡



▲ 5・13号住居跡

目 次

序 例 言

第 I 章 調査状況

第 1 節 発掘調査に至る経過	1
第 2 節 調査体制	2
第 3 節 調査の経過	3
第 4 節 地理的環境	7
第 5 節 歴史的環境	9

第 II 章 矢口遺跡の調査

第 1 節 遺 構	
住居跡	11
集石炉	14
土 坑	30
第 2 節 遺 物	
1. 遺構内出土土器	
(1) 住居跡	35
(2) 土 坑	54
2. 遺構外出土土器	56
3. 石 器	57

第 III 章 唐沢南遺跡の調査

第 1 節 調査の概要	59
第 2 節 遺 構	60
第 3 節 遺 物	60

第 IV 章 考 察

1. 矢口遺跡出土の土器について	61
2. 矢口遺跡の位置付け	64

第 V 章 まとめ	67
-----------	----

序

平出遺跡に代表されるように、塩尻市には多くの遺跡が確認されています。その中でも、今回発掘調査が行われた南内田地区を含む東山山麓一帯は、遺跡の密集地帯であると言えます。

近年、急速な開発により、地域の様相が変化してきています。このような開発の中、特に埋蔵文化財に関しては消滅の恐れがあり、それら文化財を後世に伝えていくために、その保護対策につきましては、現状保存や記録での保存という形を取り、日々努力しております。

発掘調査は、長野県総合教育センター建設工事に伴い、長野県教育委員会の委託により、平成5年6月から11月にかけて市教育委員会により行われ、縄文時代早期末～前期初頭の竪穴住居跡や土坑などの遺構や、土器・石器などの遺物が多数発見され、塩尻の歴史に新たな1ページを刻む重要な遺跡であることがわかりました。

このような先人達が残した貴重な財産である文化財を有効的に活用し、塩尻が古きものと新しきものの調和のとれた住みよい街になることを信じています。

最後に、調査にあたりご理解、ご協力を賜りました長野県教育委員会教学指導課、並びに長野県土地開発公社、その他関係機関ならびに関係者の皆様方、また、献身的に発掘作業にご協力いただきました発掘作業参加者の方々に衷心より感謝の意を表する次第であります。

平成6年3月

塩尻市教育委員会

教育長 平出友伯

例 言

1. この報告書は、平成5年度長野県総合教育センター建設工事に伴い、長野県教育委員会と塩尻市教育委員会との契約に基づいて行われた、塩尻市大字片丘南内田地区に所在する矢口遺跡と唐沢南遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、矢口遺跡で平成5年6月10日～8月28日まで、唐沢南遺跡では平成5年10月15日～11月10日にかけて、それぞれ行われた。
3. 発掘経費については、長野県教育委員会からの委託金による。
4. 本書の作成にあたり、作業の分担は次のとおりである。
遺構 … 整理、トレース：小松
土器 … 水洗：一ノ瀬、大和、古厩 注記：一ノ瀬、古厩 復元：市川、一ノ瀬、古厩
 実測：一ノ瀬、小松、古厩 拓本：一ノ瀬、古厩 トレース：小松
図版組み … 小松
写真 … 小松
5. 本書の執筆は、第1章第4節を鳥羽、第V章を小林が、それ以外を小松がそれぞれ分担して行った。
6. 本書の編集は小松が行った。
7. 調査および本書作成にあたり下記の方々に御教示、助言を賜った。
青木正洋、下平博行、田中 総、千葉剛成、堤 隆、貫田 明、
樋口昇一、守矢昌文 (順不同、敬称略)
8. 本調査の出土品、諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

第I章 調査状況

第1節 発掘調査に至る経過

平成4年4月27日	県教育委員会、市教育委員会により現地協議
9月17日～	県総合教育センター建設用地内試掘調査
10月13日	
11月6日	県教育委員会、市企画課、市教育委員会により、調査箇所についての現地協議
平成5年4月19日	埋蔵文化財包蔵地矢口遺跡発掘調査通知について（依頼）
4月28日	埋蔵文化財包蔵地矢口遺跡発掘調査通知について（回答）
5月25日	埋蔵文化財包蔵地矢口遺跡発掘調査委託契約について（依頼）
6月1日	埋蔵文化財包蔵地矢口遺跡発掘調査委託契約について（回答）
6月1日	埋蔵文化財包蔵地矢口遺跡発掘調査委託契約について（契約）
6月1日	矢口遺跡発掘調査について（通知）
8月31日	埋蔵文化財包蔵地唐沢南遺跡発掘調査委託について（依頼）
9月9日	埋蔵文化財包蔵地唐沢南遺跡発掘調査委託について（回答）
9月17日	埋蔵文化財包蔵地唐沢南遺跡発掘調査委託について（契約）
10月5日	矢口遺跡発掘調査終了について（届）
10月5日	矢口遺跡埋蔵文化財の拾得について（届）
11月11日	唐沢南遺跡発掘調査終了について（届）
11月11日	唐沢南遺跡埋蔵文化財の拾得について（届）

発掘調査実施計画（一部のみ記載）

1. 遺跡名：矢口遺跡 唐沢南遺跡
2. 発掘調査の目的及び概要：長野県総合教育センター建設工事に先立ち、2000㎡以上を発掘調査して記録保存をはかる。遺跡における発掘作業は平成5年10月31日までに終了する。調査報告書は平成6年3月31日までに刊行するものとする。
3. 調査日数：発掘作業50日 整理作業41日 合計91日
4. 調査に要する費用：9,000,000円
5. 調査報告書作成部数：300部

協力者：長野県教育委員会教学指導課、長野県土地開発公社

第2節 調査体制

(1) 矢口遺跡

団 長	平 出 友 伯 (塩尻市教育長)
担 当 者	小 松 学 (長野県考古学会員、市教育委員会)
調 査 員	小 口 達 志 (長野県考古学会員、市教育委員会) 小 林 康 男 (日本考古学協会員、市教育委員会) 市 川 二 三 夫 (長野県考古学会員)
発掘参加者	赤 沢 捨 治、市 川 隆 一、岩 垂 功、内 川 初 雄、岡 里 俊 保、 小 沢 甲 子 郎、上 条 スミ江、北 沢 喜 子 雄、倉 島 行 雄、小 泉 忠 行、 小 松 静 子、小 松 千 元、小 松 ま す 子、小 松 美 喜 男、小 松 幸 美、 小 松 礼 子、小 松 義 丸、酒 井 武 朝、酒 井 政 雄、篠 田 房 子、 清 水 年 男、高 橋 阿 や 子、高 橋 タ ケ 子、高 橋 鳥 億、田 中 悰、 手 塚 さ く へ、寺 沢 俊 子、中 原 一、樋 口 雄 一、藤 松 謙 一、 洞 義 昌、松 島 ま つ 子、南 沢 み や 子、宮 崎 秀 賢、百 瀬 益 貴、 山 口 伸 司、山 本 政 晴、由 上 は る み
整理参加者	一ノ瀬保美、一ノ瀬 文、大和あさ子、大和 廣、田中ひさみ、 古 厩 肇 子、山 本 紀 之、山 本 光 子

(2) 唐沢南遺跡

団 長	平 出 友 伯 (塩尻市教育長)
担 当 者	小 松 学 (長野県考古学会員、市教育委員会)
調 査 員	小 口 達 志 (長野県考古学会員、市教育委員会) 小 林 康 男 (日本考古学協会員、市教育委員会) 市 川 二 三 夫 (長野県考古学会員)
発掘参加者	市 川 隆 一、内 川 初 雄、小 沢 甲 子 郎、小 泉 忠 行、小 松 静 子、 小 松 千 元、小 松 美 喜 男、小 松 幸 美、清 水 年 男、高 橋 阿 や 子、 高 橋 鳥 億、藤 松 謙 一、山 口 伸 司、由 上 は る み
整理参加者	一ノ瀬保美、一ノ瀬 文、大和あさ子、大和 廣、古 厩 肇 子
事 務 局	市教委 総合文化センター所長 武 居 範 治 " 文化教養課長 松 崎 宏 征 " 文化教養課長補佐 大 和 清 志 " 平出遺跡考古博物館長 小 林 康 男 " 平出遺跡考古博物館学芸員 小 口 達 志 " 平出遺跡考古博物館学芸員 小 松 学

第3節 調査の経過

(1) 矢口遺跡

- 6月10日(木) 小林康男平出遺跡考古博物館長の挨拶に続き、調査担当者より現場説明および発掘調査上の注意事項の説明をおこない発掘調査を開始する。調査区内には遺構確認のために幅1mのトレンチを4本設定し、掘り下げを行う。トレンチ内からは縄文時代早期を中心とした遺物が出土する。
- 11日(金) トレンチの掘り下げを行い、遺構らしい落ち込みを確認する。
- 12日(土) 引き続きトレンチの掘り下げを行い、遺構確認面までの深さと遺物の分布の範囲などを確認する。
- 15日(火) 発掘作業を一時中止し、調査区内に重機を入れ遺構を破壊しないよう細心の注意を払いながら、地表から20～30cmの厚さで表土の除去作業を行う。
- 16日(水) 重機による表土剥ぎと並行して、表土剥ぎを終了した地区を作業員により遺構検出作業を行う。
- 17日(木) 前日に続き表土剥ぎと遺構確認作業を行う。
- 18日(金) 重機による表土剥ぎを終了する。
- 22日(火) 遺構確認作業を行い、早期末の東海系土器が出土する。
- 24日(木) 遺構確認作業
- 25日(金) 遺構確認作業中に神子柴型尖頭器が出土する。
- 30日(火) 継続的に雨が降る中、遺構確認作業を行うが、雨足が強くなったため午後の作業は中止する。
- 7月1日(木) 遺構確認作業を行う。
- 2日(金) A-2グリット内で集石遺構(1号集石炉)を確認する。
- 3日(土) 遺構確認作業を行い、C-5グリットより板状石皿が出土する。
- 6日(火) 1号集石炉の遺構平面図を作成する。
- 7日(水) 引き続き遺構確認作業を行い、D-3グリットから破損しているが滑石製の垂飾りが出土する。1号集石炉の調査を行う。
- 8日(木) 1号集石の調査の続きを行うとともに、A-1・2グリットの排土置場予定地の調査を優先的に行う。
- 9日(金) 塩尻市誌編集委員の樋口昇一先生に現場にてご指導いただく。
- 10日(土) A-1・2グリットの調査を行い、調査区北側隅より落ち込みを確認する。
- 13日(火) 前回確認した落ち込みを調査した結果、風倒木痕であることが判明し、排土置場の予定地内に他に遺構が検出されなかったため、A-1・2グリットの調査を終了し排土を置き始める。
- 14日(水) 遺構確認作業を行っていたが、激しい雨のために作業を午前で終了する。
- 15日(木) これまでの遺構確認作業の結果、調査区の南側部分に比較的遺構が集中していることが確認され、南側を中心に調査を行うことにした。
- 16日(金) C-5グリットよりチャート製の縦型石匙が出土し、他のグリットからも

- 凹石や敲石などの石器や土器が多く出土している。
- 17日(土) 遺構検出作業を行うが、降雨のため午後の作業を中止する。
- 20日(木) 遺構検出作業を行い、C-3、C-4グリットより住居跡らしきプランを確認する。また、B-4グリットから1号住居跡が、B-2グリットからは2号住居跡、A-3とB-3グリットの境界から3号住居跡がそれぞれ確認される。C-3グリットからは土製の文政二朱銀が出土する。
- 21日(木) 遺構検出作業を行う。
- 22日(木) 確認された遺構の掘り下げを開始する。
- 23日(金) 土坑より黒曜石がかたまって出土し、貯蔵穴の可能性があること期待されたが、住居跡であることが判明する。2号住居跡からは浅いながらも周溝が検出される。また4・5・6号住居跡からは床面の一部が確認される。これまでに総数11軒の住居跡が確認された。
- 27日(火) 遺構掘り下げ。
- 28日(水) 完掘された遺構の平面図の作成を行う。
- 29日(水) 遺構の掘り下げと測量を並行して行う。
- 30日(金) 降雨のため遺構掘り下げの作業を午前中で中止にする。
- 31日(土) 遺構掘り下げおよび遺構平面図作成。
- 8月4日(木) セクションをとり終えた住居跡のベルトを外し、住居跡の精査を行う。
- 5日(木) 住居跡などのセクションの実測を行うとともに、住居跡の精査を行う。16住居跡からは滑石製の扶杖耳飾が出土する。
- 7日(土) 住居跡内の遺物の取り上げを行う。15号住居跡の床面から胴上半部がほぼ完全な縄文時代前期初頭の土器が出土し、底部が残っていることを期待して掘り進めたが、残念なことに底部は残存していなかった。
- 9日(日) 本来は休日であるが、これまで雨が頻繁に降ったため作業が思うように進まず予定以上に発掘が延びてしまい、作業を行う。住居跡の測量を行う。
- 10日(火) 3・14号住居跡のセクションをとった後、11号住居跡のベルトを取り除く。14号住居跡にはしっかりとした周溝が廻っていることを確認する。
- 11日(水) 住居跡の精査を行い、写真撮影をおこなう。
- 12日(水) 土坑の掘り下げと住居跡の完掘写真の撮影をする。
- 17日(火) 土坑の掘り下げを行うが降雨のため午後の作業を中止する。
- 18日(水) 土坑掘り下げと遺物の取り上げを行う。
- 19日(木) 調査区西側は中・後期の土坑が中心であることを確認する。
- 20日(金) 住居跡の精査と土坑の掘り下げ。
- 23日(日) 土坑の掘り下げと土坑内の遺物の取り上げを行う。
- 24日(火) 空中写真撮影のため調査区内の精査を行う。
- 25日(水) ラジコン飛行機により空中写真撮影を行う。
- 26日(木) 未調査部分の遺構検出と遺構の掘り下げを行い、土坑から中期の無文土器片が出土する。

- 27日(金) 雨が降る中、土坑の掘り下げを行うが、雨足が強くなり午後は中止とする。
28日(土) 調査区内に残された遺物の取り上げとともに機材の撤収を行い、矢口遺跡の発掘調査を終了する。

(2) 唐沢南遺跡

- 10月15日(金) I区の調査開始。テント設営など調査の準備を行った後、調査区内の表土剥ぎを行う。表土中より縄文中期の土器や打製石斧が出土する。
16日(土) 遺構検出面まで深い場所で70cmもあり表土剥ぎの作業は困難を要したが、表土剥ぎをほぼ終了する。表土中からは少量の遺物が出土しただけで思うような成果はあがらなかった。
19日(火) 遺構検出作業を開始する。遺構は検出されなかったが、縄文土器や打製石斧が出土し、寛永通宝も1枚出土する。
20日(水) 遺構検出作業で数箇所の落ち込みを確認する。
21日(木) 引き続き遺構検出作業を行う。
22日(金) 遺構検出作業および土坑の半掘を行う。
23日(土) 土坑の半掘および全掘を行うとともに、土坑の土層観察を行った結果、土坑と考えられた遺構の中に攪乱がいくつか含まれることが確認された。全掘後、遺構の測量を行いI区の調査を終了する。
11月9日(火) 幅1mのトレンチを3箇所設定し、II区の調査を開始する。表土剥ぎを開始する。3箇所の落ち込みを確認する。
10日(水) 遺構確認を行い確認された落ち込みを掘り下げるが、遺物はまったく確認されなかった。調査区の平面図を作成しすべての調査を終了する。

遺跡の状況と面積

遺跡名	場 所	現況	種 類	全体面積	事業対象面積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
矢 口	塩尻市大字片丘 字南唐沢6347-1 Ⅱa	畑	集落址	18,000㎡	71,750㎡	1,500㎡	6,000㎡	7,500,000円
唐沢南	塩尻市大字片丘 字南唐沢6374-イ Ⅱa	山林	包蔵地	12,500㎡	71,750㎡	500㎡	500㎡	1,500,000円

第1表 発掘調査経過表

月	矢 口	唐 沢 南
6	10 28	
7		
8		
9	遺物整理 図面作成 原稿執筆	15 10 遺物整理 図面作成 原稿執筆
10		
11		
12 2		
主な遺構	<ul style="list-style-type: none"> 縄文時代早期末～前期初頭住居跡 — 16軒 縄文時代土 坑 — 143基 	<ul style="list-style-type: none"> 縄文時代土 坑 — 12基
主な遺物	<ul style="list-style-type: none"> 旧石器時代 <ul style="list-style-type: none"> 槍先形尖頭器 縄文時代 <ul style="list-style-type: none"> 土器 石器 耳飾り 	<ul style="list-style-type: none"> 縄文時代 <ul style="list-style-type: none"> 土器 石器

第4節 地理的環境

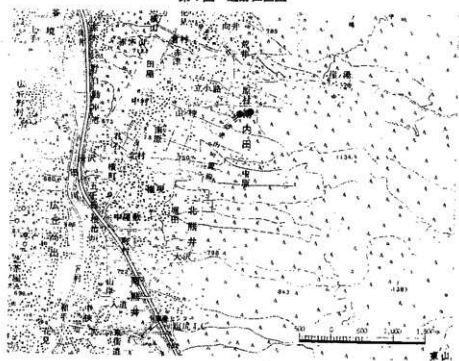
位置と地形

矢口・唐沢南遺跡は、塩尻市大字片丘南内田地籍に所在し、塩尻市の東方に延びる片丘丘陵上に位置する。

片丘丘陵は鉢伏山塊（鉢伏山、高ボッチ山、東山）の西麓斜面に沿って発達した丘陵で、洪積世中頃（約70万年前）に松本盆地南半部で起こった南北性の断層運動によって生じた崖錐性堆積物を基盤とする。塩尻東地区の小板田付近から松本市寿付近まで2km前後の幅を維持して約10kmにわたって延びており、平均勾配は6°と相当急な斜面を西に向けている。丘陵上には山麓から流下する群小の河川によって形成された複合扇状地がよく発達しており、その扇端は盆地縁辺の河岸段丘面に接している。これらの諸河川はいずれも塩尻峠に源を発し、丘陵直下を北流している田川にほぼ直角に流れ込んでいる。

矢口・唐沢南遺跡が立地する丘陵は、内田の塩沢川と北熊井の小場ヶ沢川によって形成された広範囲の複合扇状地の上にあり、現在、北側を中洞川に南側を南洞川によってそれぞれ深く開折されているため、ちょうどテラス状の緩斜面をなしている。両河川は塩沢川扇状地と小場ヶ沢川扇状地の縫合線上の凹地をほぼ直線上に流下しており、赤木山丘陵に浸食谷（3～10m）を形成しながら田川へと注いでいる。現在の水量が少ないにもかかわらず、浸食による開折地形は著しく、発掘地との比高差は5～7mを測る。

第1図 遺跡位置図



地質

崖錐性堆積物はフォッサ・マグナ西縁の断層崖の形成時に産出されたもので、この付近の基盤である古生層および洪積世前期の塩嶺累層を不整合に被覆し、層厚は約30m、盆地へ向って10°前後の傾斜をなしている。下部の片丘礫層は塩尻市長畝を模式地とし、上部の赤木山礫層は松本市寿赤木山を模式地としているが遺跡付近では共存している。両者は不整合関係を有しているが岩相が極めて類似しているため識別は困難で一括扱いられている。角礫～亜角礫層で淘汰は悪くマトリックスは火山灰質シルトである。礫種は古生層起源の硬砂岩、粘板岩、珪質頁岩、新第三系の砂岩、凝灰岩、貫入の石英閃緑岩、第四系塩嶺累層の安山岩など多様に富んでいるが、遺跡付近では石英閃緑岩、凝灰岩、砂岩の比率が目立つ。

これらの礫層の上位には火山灰起源のローム層が3m前後の層厚で被覆している。軽石を含む小坂田ロームと含まない褐色の波田ロームに大別され、両者は比較的整然と堆積しているが、本層最上部は河床や乱流の跡を残し水成の二次ロームであることを示唆している。

層序

ローム層最上部はかなり水の影響を受けており、ローム質粗粒砂土が厚く堆積する。淘汰が良く分級作用が進んでいるところから扇状地堆積物と考えられ、おそらく中洞川、南洞川の浸食開析がまだ始まっていない頃の堆積物であろう。

礫混りロームは褐色を呈するシルト層で、かなり大きな(max20cm)亜円礫を混入する。発掘地区の北側と南側ではかなり様相を異にし、礫の混入度は北側で著しい。このことは当時、北西方向に傾斜していた扇状地面が南洞川の浸食復活にあたり、河流を北から南へ移動させたために、傾斜面を南北方面にかえたことを示唆している。ロームには軽石を混入させていないことから波田ロームと考えられるが、風成(降灰)のものではなく水成の二次ロームであろう。

表土は黒褐色土と暗褐色土により構成され、層厚は南へいくにつれて厚くなる。付近は傾斜地であるため特に土壌浸食、再堆積が著しく、遺跡の土壌もこういった背後の山麓の浸食・風化などによって堆積した崩積土を起源としており、拳大の中礫を多く含む堆積土である。

第5節 歴史的環境

矢口・唐沢南遺跡が位置する東山山麓は、高ボッチ山麓から流下する群小の河川により形成された複合扇状地や舌状台地が発達しており松本平でも有数の遺跡密集地帯となっている。

この東山山麓には、縄文時代を中心に、古くは旧石器時代の生活の痕跡もみられ、この地域が昔の人々にとって格好の生活の場であったことが窺える。以下本遺跡周辺の遺跡について概観してみたい。

旧石器時代の遺跡としては山の神、向陽台遺跡があげられる。山の神遺跡からは黒曜石の集中箇所が発見され、向陽台遺跡ではナイフ形石器が発掘されている。

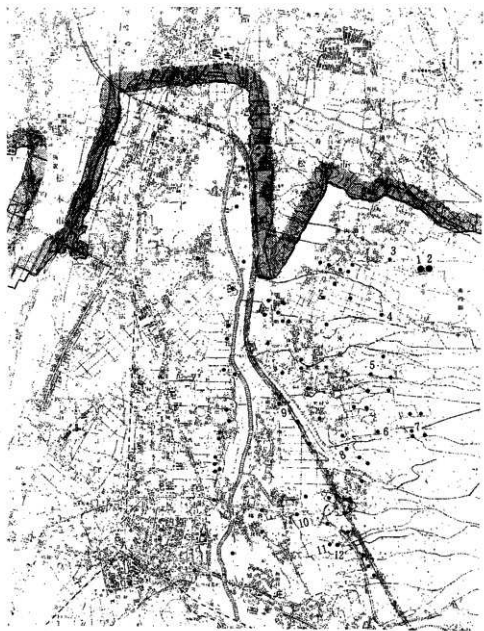
縄文時代になると遺跡数は爆発的に増加する。現在のところ草創期の遺跡は確認されていないが、早期に入ると竜神平、廻原、山の神、福沢、堂の前、向陽台などの遺跡がみられるようになる。このうち向陽台、竜神平、堂の前遺跡からは住居跡が検出され、特に向陽台遺跡からは押型文期の住居跡4軒、集石炉4基が、堂の前遺跡では早期後半に比定される住居跡が5軒検出されている。

前期では、中原、竹の花、剪屋敷、小丸山、八幡原、古屋敷、女夫山ノ神など多くの遺跡がみられるようになる。とりわけ剪屋敷遺跡からは10軒の住居跡が検出され、それに伴い数多くの遺物が出土し、重要な資料を提供している。また、矢口遺跡に近接する古屋敷遺跡からも住居跡が検出されている。

中期の遺跡は枚挙にいとまがないほど多くの遺跡があり、狐塚、渋沢、小丸山、廻原、上木戸、大沢遺跡などはその一部である。このうち廻原遺跡からは、縄文時代中期全般にわたり、計147軒の住居跡が中央広場を囲んで環状に配列される形で検出されている。また、本遺跡に近接する小丸山遺跡からは26軒の住居跡が発掘されている。

後・晩期の遺跡は中期と比較できないほど激減し、竜神、上木戸、桜沢、別方など僅かな遺跡しか残されず、遺物量も非常に少なく、冬の時代と言える様相を呈している。

弥生時代では、生活域が山麓から田川流域へと下りていく傾向がみられる。このような中、向陽台、上木戸遺跡では後期に比定されるまとまった集落址が発見され、向陽台、君石、犬原、中狭遺跡では方形周溝墓が検出され、また渋沢、花見、中原、横町、狐塚、久保在家、竹ノ花遺跡などで遺物が確認されている。



第2圖 周辺遺跡分布圖

- | | | | |
|----------|-----------|------------|-----------|
| 1. 矢口遺跡 | 2. 唐沢南遺跡 | 3. 古屋敷遺跡 | 4. 小丸山遺跡 |
| 5. 野屋敷遺跡 | 6. 中原遺跡 | 7. 女夫山ノ神遺跡 | 8. 畑原遺跡 |
| 9. 上木戸遺跡 | 10. 向隅台遺跡 | 11. 福沢遺跡 | 12. 堂の前遺跡 |

第Ⅱ章 矢口遺跡の調査

第1節 調査の概要

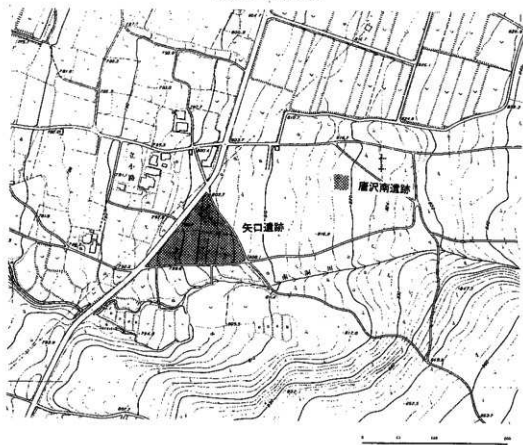
矢口遺跡は、塩尻市片丘南内田地籍に所在し、背後に控える高ボッチ山麓から流下する群小の小河川により形成された台地上に位置する。遺跡はこのような台地に沿って東西に長くのびる形状をとっている。今回の発掘調査は長野県総合教育センター建設工事に伴い、遺跡の中心地にあたる箇所を調査を行った。

調査の結果、縄文時代早期末～前期初頭に比定される住居跡が16軒検出された。また、住居跡と同時期に比定できると考えられるものを中心に、縄文時代後期まで時期が下る。143基の土坑が検出されている。この他に時期は特定できないが、1基の集石炉が検出された。

矢口遺跡は、以前にも今回の調査区西側に隣接する地区で発掘調査が行われ、土坑41基、集石1基、溝状遺構1基が検出され、それに伴い縄文時代中期末葉の曾利Ⅳ～Ⅴ式期を中心とする土器や石器が確認されている。今回の発掘においても、前回調査と同時期の遺構および遺物が確認されており、該期の遺跡の範囲を捉えることができた。

遺物は、縄文時代早期末～前期初頭の土器が中心であり、他の時期の遺物は比較的少ない。

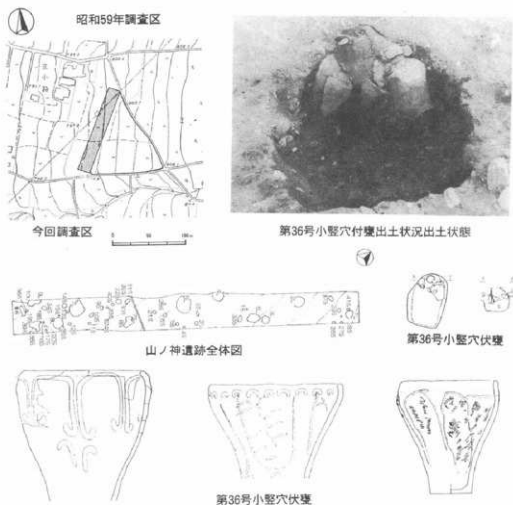
第3図 遺跡位置図



過去の調査

昭和59年に今回の調査区に隣接した場所において行われた発掘調査において最も大きな成果は伏甕が出土した36号小竪穴を含む縄文中期後葉に比定されると思われる41基の土坑群の発見である。小竪穴（土坑）以外にもロームマウンドが10基検出されているが、遺構の性格は風倒木痕など諸説あるがはっきりしたことは言えない。また、集石も1基検出されているが、時期決定をするような伴出遺物の出土がなく、時期決定は不可能であった。今回の調査を含め、該期の住居跡は検出されておらず土坑に伴う住居跡の特定が今後の課題である。

第5図 山ノ神遺跡（現 矢口遺跡）



第2節 遺 構

1号住居跡（第6図）

調査区の東側に位置し、12号住居跡と切り合い関係にある。住居跡西側部分の壁高は約10cmであり、他の部分の壁高は約15cmである。12号住居跡との関係で北側の一部で明確な壁の検出ができなかったが、東西5.1m、南北3.8mの長楕円形のプランを呈する住居である。覆土は1層のみで、自然流入土による堆積であると考えられる。覆土中からは縄文時代前期初頭の土器を中心に出土したが、出土量は少ない。

床面は、東から西へ緩やかに傾斜しており、地山のローム層が大小様々の礫が混入する地質であるため全体的に凹凸が激しいが、部分的ながら踏み固められた床面も検出された。

柱穴は深いもので40cm、浅いもので15cmと一定せず支柱穴の特定は困難である。また、住居内には炉と思われる施設は確認されなかった。

本址は出土土器からみて、縄文時代前期初頭に比定される。

2号住居跡（第7図）

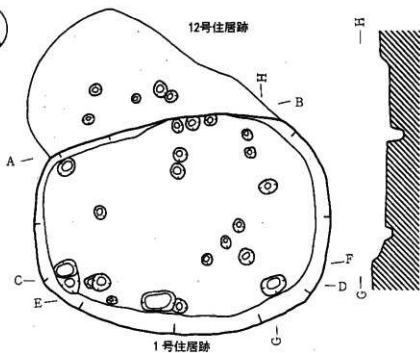
1号住居跡の西側に位置する。住居跡は西側を126号土坑と攪乱によって切られているが、南北6m、東西2mの隅丸長方形のプランを呈するものと思われる。覆土は暗褐色土が1層みられ覆土内より縄文前期初頭の土器が出土した。東側と北側の一部には壁に沿って幅15cm、深さ約10cmの周溝が廻る。壁は北側と東側で20cm、南側と西側で10cmとなっており東から西へ僅かに傾斜がみられる。床面は $\frac{1}{2}$ 程度しか残存していないが、残存部ではロームを踏み固めた比較的しっかりした床が確認された。ピットは2本検出され、深さは20cmと15cmであるが残りは切り合いによって破壊され確認することができなかった。また、住居跡から炉は検出されなかった。

本址は住居跡内出土遺物からみて、縄文時代前期初頭に位置付けられる。

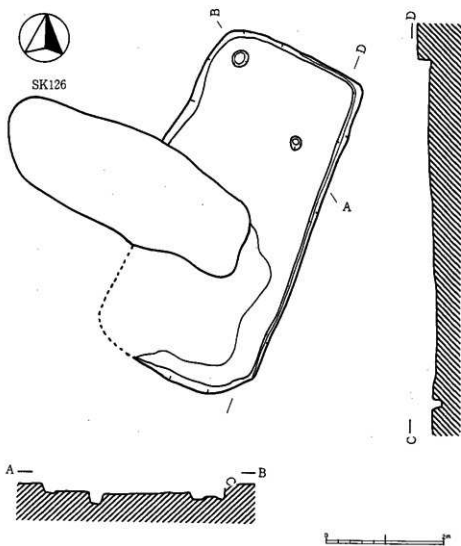
3号住居跡（第8図）

2号住居跡の北西、調査区の北側に位置する。住居のプランは、長径5.2m、短径3.5mの長方形を呈している。覆土は暗褐色土層と黄褐色土層の2層で、下層の黄褐色土層にはロームブロックが多く含まれていた。住居跡上部は攪乱を受けているため壁の立ち上がりを明確に捉えることができなかったが、残存する壁は高さ10～15cmと低く、立ち上がりは緩やかである。また、住居跡北側と西側部分には壁面に沿うように、深さ20cm前後の周溝がみられる。床面はロームを掘り込んで形成されており、緩やかに傾斜がみられ、西側部分には堅緻な床面がみられる。ピットは9本確認され、深いもので50cm、浅いもので15cmであるが、規則的なピットの配列はなされておらず、支柱穴は特定できない。

本址は出土土器からみて、縄文時代前期初頭に比定される。



第6圖 1・12号住居跡



第7図 2号住居跡

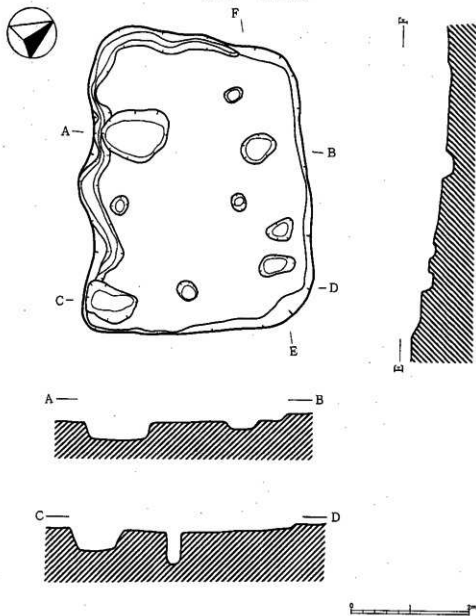
4号住居跡 (第9図)

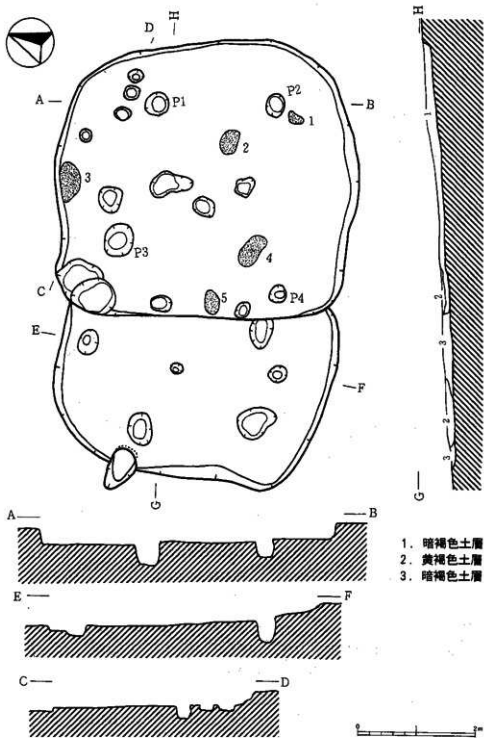
調査区東南端に位置する。6号住居跡との切り合い関係により西側部分の壁の検出は困難であったが、直径約5mの隅丸方形のプランを呈する。覆土は2層みられたがほぼ半層であるとかんがえられ、覆土中より縄文早期末～前期初頭の遺物が比較的まとまって出土した。壁高は西側部分以外は15～20cmで、西側部分は5cm前後であり、垂直に近い立ち上がりをもつ。床面は東から西への傾斜がみられ、ほぼ平坦な堅い床である。16本のピットが検出され、この内、P1～P4の4本が主柱穴であると考えられる。また、住居跡内からは5箇所で焼土が確認され、1・3・4

は床面より5~10cmレベルが高く、本址とは直接関係ないと思われ、2・5は地床炉である。2は長軸45cm、幅30cmあり、5は長軸45cm、幅25cmで共に楕円形をしている。2は本址に伴う地床炉であると考えられるが、5は焼土の厚さも薄く、位置する場所から考えると6号住居跡に伴う地床炉である可能性がある。

本址は、出土土器から縄文時代早期末~前期初頭に比定される。

第8図 3号住居跡





第9圖 4·6号住居跡

5号住居跡（第10図）

6号住居跡の西側に位置する。住居跡の北側は13号住居跡と切り合い関係にあるため、明確な立ち上がりは不明であるが、長軸5.2m、幅4.3mの長方形のプランを呈すると思われる。覆土からは、早期末～前期初頭の遺物が出土しているが、量的には多くない。床面は自然地形と同様に東から西への緩やかな傾斜がみられ、ロームを踏み固めたしっかりした床になっている。壁は東・南壁に比べ西壁は低くなっており、比較的急な立ち上がりをみせている。住居跡中央付近では焼土が5箇所を確認され、4・5は床面より高い位置にあるため地床炉とは考えられないが、1～3は地床炉である。ピットは全体的に浅く15～20cmの深さしかない。中央部の焼土を境にピットが対照的に配置されているようにみえるが、どのような構造であったのかは不明である。

本址は出土した土器から、縄文時代早期末～前期初頭に位置付けられる。

6号住居跡（第9図）

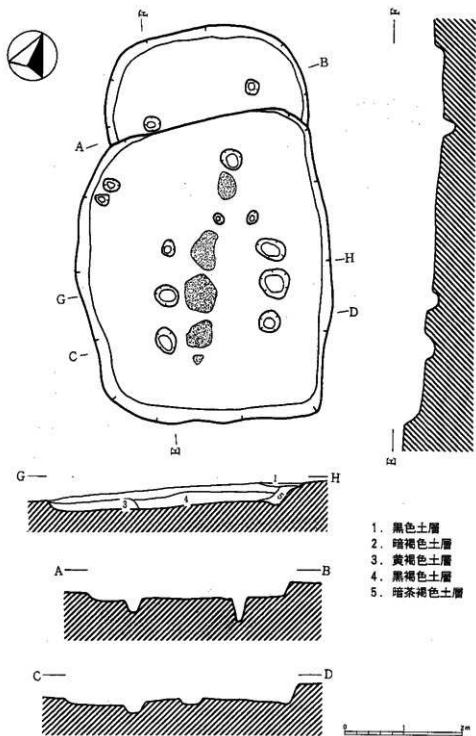
4号住居跡に切られているため、全体の $\frac{1}{2}$ 程度が消滅しているが、おそらく隅丸方形のプランを呈していたと考えられ、4号住居跡よりもやや小規模な住居跡である。覆土からは遺物の出土がほとんどみられなかった。残存する壁高は約10cmで、緩やかに立ち上がっている。床面はロームを掘り込んでつくられており、しっかりとした床であり、西へ向って緩やかに傾斜している。住居内に炉に相当する施設は見当たらないが、4号住居内にある5の地床炉が該当する可能性があるが判然としない。6本のピットがあり20～40cmの深さがある。

本址からは、住居の時期を比定できるような資料が出土しなかったため出土土器による時期決定はできないが、切り合い関係からみて4号住居跡よりやや古い時期に比定されると思われる。

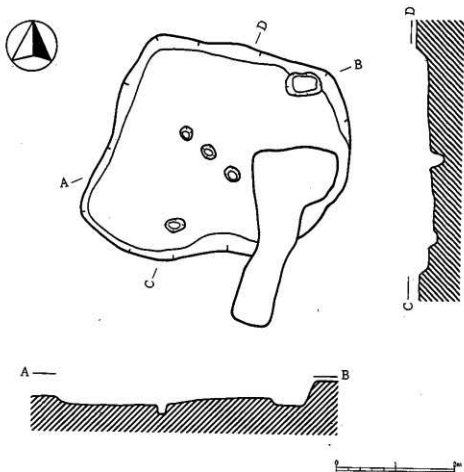
7号住居跡（第11図）

調査区の中央部、10号住居跡の北に位置する。住居の東南部を攪乱により破壊され、明確なプランは不明である。覆土は上層が褐色、下層が暗褐色を呈しており、遺物は下層を中心に縄文早期末～前期初頭の遺物が出土したが、出土量は少ない。壁は西側で10cmを測り、他の部分は20～30cmである。床は自然傾斜と同様、東から西へわずかながら傾斜している。床面は平坦で堅緻であるが、攪乱によって壊されている部分があり完全な形では残っていないのが残念である。ピットは5本検出され、中央部に直径25cm、深さ約15cmのピットが等間隔に3本配置されているが、どのような構造であったのかは不明である。堅緻な床を有していた住居であるにもかかわらず、攪乱によって破壊されたのか、炉は検出されなかった。

本址は出土土器より、縄文時代早期末～前期初頭に比定される。



第10圖 5・13号住居跡

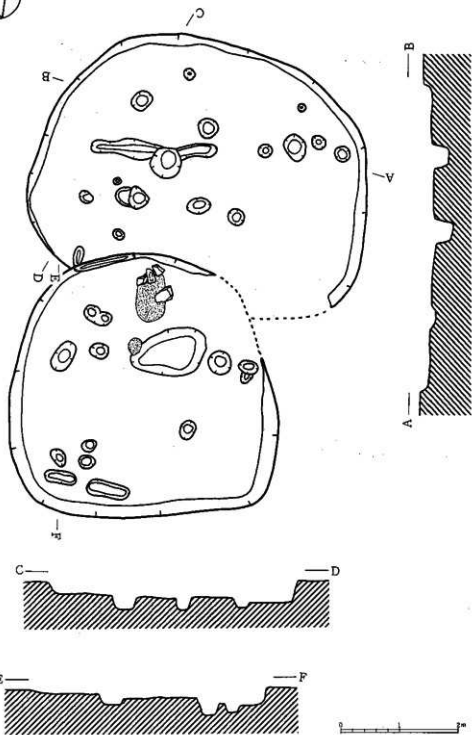


第11図 7号住居跡

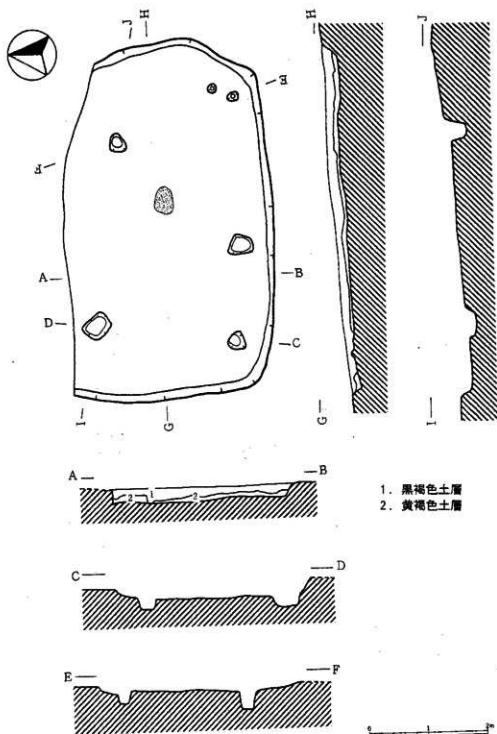
8号住居跡 (第12図)

9号住居跡の南側に位置し、15号住居跡に切られている。長軸は5.8mを測り、西側は15号住居跡に切られているためはっきりしないが、楕円形のプランを呈するものと思われる。覆土からは縄文早期末の東海系の土器や前期初頭の縄文系土器が大量に出土した。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は15~20cmである。ピットは深さ30cm程度のしっかりとしたものが多い。住居中央付近には一見周溝とも思える幅約35cm、長さ2.15m、深さ30cmの溝状の掘り込みがみられる。床面は平坦で堅緻であるが、西側の一部が擾乱の影響により不明瞭となっている。炉と考えられる施設は見当たらない。

本址は出土土器からみて、縄文時代早期末~前期初頭に比定される。



第12圖 8・15号住居跡

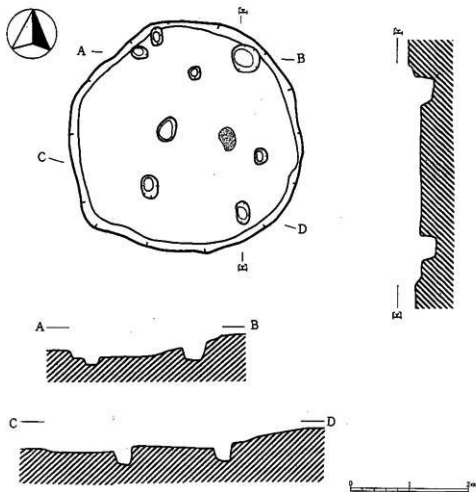


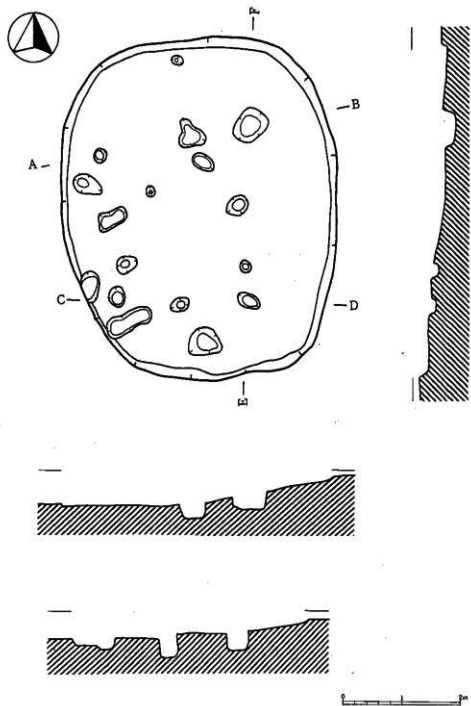
9号住居跡 (第13図)

8・15号住居跡の北側に位置する。長軸6.1mを測る比較的長い住居である。しかし、北側部分が深い攪乱により破壊され全容の把握はできなかった。覆土は上層が黒褐色、下層が暗褐色土層の2層に分けられ、下層から縄文前期初頭の土器がまとめて出土した。破壊されている北側部分を除き、緩やかに立ち上がる壁が確認でき、壁高は5～15cmと低い。住居中央部には長軸45cm、幅30cmの地床炉がみられる。ピットは6本と少ないが、20～30cmの深さを測るしっかりしたものである。

本址は出土土器から、縄文時代前期初頭に位置付けられ、矢口遺跡の住居跡の中でも新しい時期のものであると思われる。

第14図 10号住居跡





第15图 11号住居跡

10号住居跡（第14図）

7号住居跡の西南、9号住居跡の東側に位置する。直径4mの不整形のプランを呈する。覆土からは、少量ではあるが縄文前期初頭の土器が出土している。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は約10cmと低くなっている。床は自然地形同様、東から西へ緩やかに傾斜しているが、平坦な堅緻な床面である。住居中央付近には直径35cm、深さ3～5cm程の浅い掘り込みがみられ、その脇に長径40cm、幅20cmの地床炉がある。掘り込み内から焼土は確認されなかったが、炉として使用された可能性がある。ピットは8本検出され、それぞれ約30cmの深さをもち、柱穴として利用されていたと考えられるしっかりとしたものである。

本址は出土土器から、縄文時代前期初頭に比定される。

11号住居跡（第15図）

15号住居跡の西側に位置し、今回検出された住居跡の中でもっとも西側、つまりもっとも標高の低い位置に存在している住居跡である。長軸5.9m、短径4.7mの長楕円形のプランを呈する住居である。覆土からは縄文早期末～前期初頭の土器が出土した。床は、北西方向に緩やかに傾斜し、平坦で堅緻である。壁は垂直に近く立ち上がり、壁高は北・東側10cm、南側15cm、西側5cmとなっている。ピットは17本検出されたが、主柱穴の特定は困難である。また、炉と思われる施設は確認されなかった。

本址の時期は、出土土器からみて縄文時代早期末～前期初頭である。

12号住居跡（第6図）

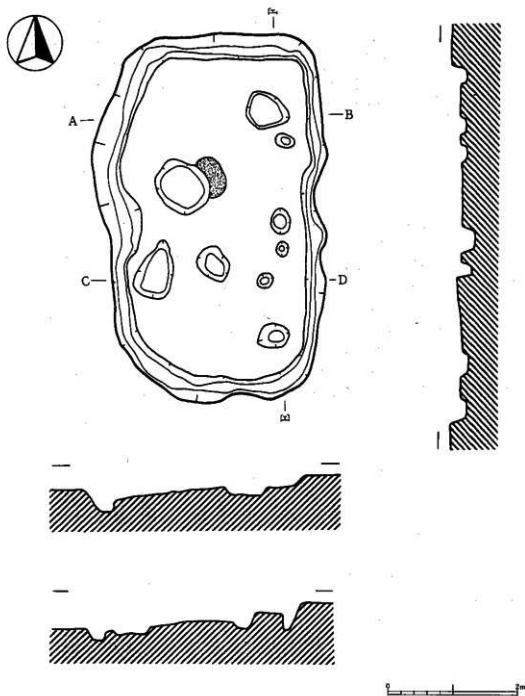
1号住居跡と切り合い関係にあり、また削平を受けているため床面の一部と僅かにピットが残されているだけで、壁の立ち上がりはまったく確認されなかった。確認された床面は平坦で堅緻なものである。また、住居内に焼土などを確認することはできなかった。

本址からは遺物の出土がなく、時期判定は困難であるが、1号住居跡に切られていることからみて、1号住居以前の時期のものであることは確かである。

13号住居跡（第10図）

5号住居跡に切られており、残存部分は長径3.4m、短径1.5mである。壁は垂直に近く立ち上がり、壁高は15cm程度である。住居内にはピットが2本あり、21cm、41cmとしっかりとした掘り込みがみられ、本址の主柱穴と考えられる。床は地山のロームを掘り下げて形成され、平坦で堅緻な床面である。また、焼土などの検出はなされなかった。

本址は5号住居跡との切り合い関係から、5号住居跡よりやや時期が遅いと考えられるが、早期末～前期初頭の時期の範疇に納まると考えられる。



第16圖 14号住居跡

14号住居跡 (第16図)

13号住居跡の北西にあたり、長軸5.7m、幅3.6mの長方形のプランを呈する住居跡である。本址は当初、遺構確認の段階で土坑であると判断し掘り下げていったが、周溝の一部が検出されたため方針を変更して住居跡として掘り進めていった。覆土からは縄文前期初頭の土器が出土したが、量的には僅かである。壁際には、深さ20cm、幅20~30cmのしっかりした周溝が廻っている。ピットは8本検出されたが大きさや深さが一定ではなく、また配置からみても主柱穴の特定は難しい。住居中央付近には長径65cm、幅30cmのしっかりとした地床炉がみられ、地床炉に隣接して直径約80cm、深さ約15cmの掘り込みがあり、内側に僅かながら焼土が確認されており、炉として使用されていたと思われる。

本址は出土土器から、縄文時代前期初頭に位置付けられる。

15号住居跡 (第12図)

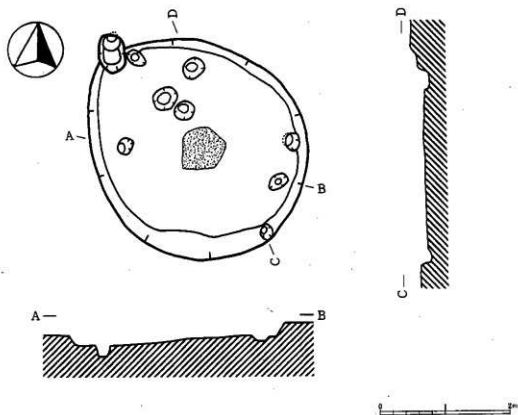
8号住居跡を切っている。住居の半分は攪乱によって破壊されているため床面の残りはあまり良好ではないが、残存部分の床面は平坦で堅緻なものである。床は自然地形に沿って緩やかに傾斜し、東側以外の壁は比較的良好に残っており、壁高は北壁で20cm、西壁で25cm、南壁で35cmである。住居の東端部には石囲炉を思わせる遺構がみられる。長さ90cm、幅50cmにわたって焼土がみられ、焼土の縁辺には石が置かれている。これらの石は意識して配列されている様子はみられないが、強い焼成を受けており非常に脆くなっている。住居の東側と西側には周溝と思われる掘り込みがみられるが、部分的であり釈然としない。ピットは深さ25~30cmといった良好なものが多くみられるが、住居南西部分が攪乱のため破壊され全体の配置は確認できなかった。

本址は床直で縄文時代前期初頭の土器が出土していることなどから、該期に比定されると思われる。

16号住居跡 (第17図)

7号住居跡の北西に位置する。長軸3.7m、幅3.3mの不整形のプランを呈し、矢口遺跡においてもっとも小規模な住居跡である。柱穴は壁際に沿って廻るように配置されており、ピットの深さは20cm前後となっている。壁の高さは15~20cmで、床面は東から西へ緩やかに傾斜し、堅緻な床である。住居中央部に長さ65cm、幅65cmの地床炉があり、地床炉に隣接した床面に板状石皿が出土している。覆土からは縄文早期末~前期初頭の遺物が出土している。

本址は出土土器からみて、縄文時代早期末~前期初頭に位置付けられ、矢口遺跡の中でも初期頃の住居跡であると思われる。



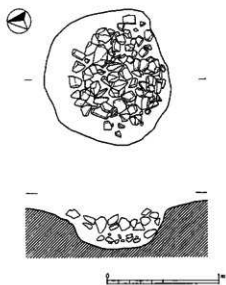
▲ 第17図 16号住居跡

◀ 第18図 1号集石炉

1号集石炉 (第18図)

調査区の北端に位置し、周辺には他に遺構は検出されず単独で存在していた。長径120、幅110、深さ35cmの掘り込みの覆土中に焼成を受けた礫が介在していた。礫の大きさをみると、上部は10~15cmの礫が中心であり、下部になると礫が小さくなる傾向がみられ、礫周囲には黒色土がびっしり詰まっており、黒色土に混じって炭化材もみられた。

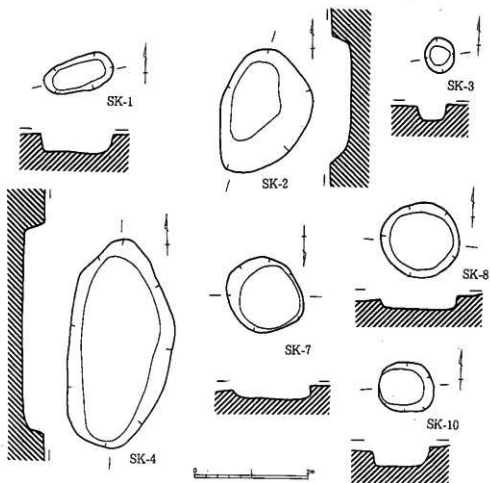
遺物は全く出土せず、時期決定はできなかった。

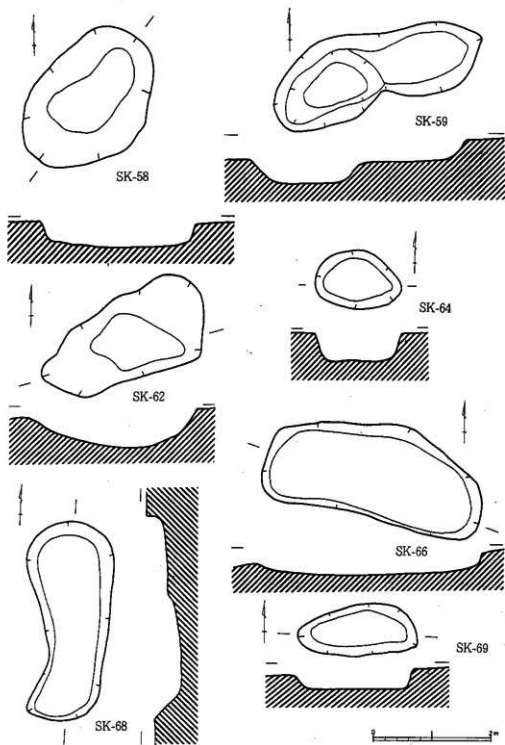


土坑 (第19~23回)

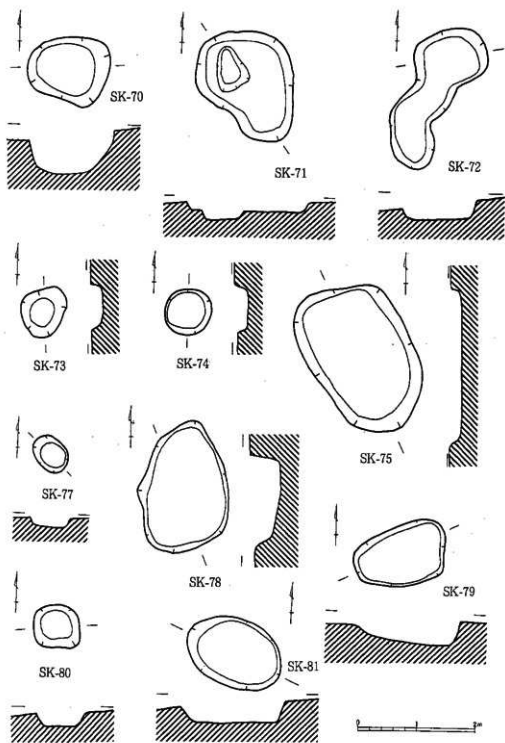
矢口遺跡からは143基の土坑が検出された。土坑は大きく2つのブロックに分割される。1つは住居跡が検出された調査区中央～上半部分であり、もう1つは調査区下半部である。住居跡付近に位置する土坑は、出土遺物から住居跡とほぼ同時期の遺構であると考えられ、下半部に位置する土坑は前者とは時期的に開きがあり、縄文時代中期後葉～後期前葉に該当する遺構である。後者は昭和59年に発掘調査が行われた山ノ神遺跡(名称変更により現在は矢口遺跡)と隣り合っており、前回調査の時にも同時期の遺構及び遺物が確認されているため、該期の遺構の広がりは下へと延びることが予想される。

第19回 土坑 (1)

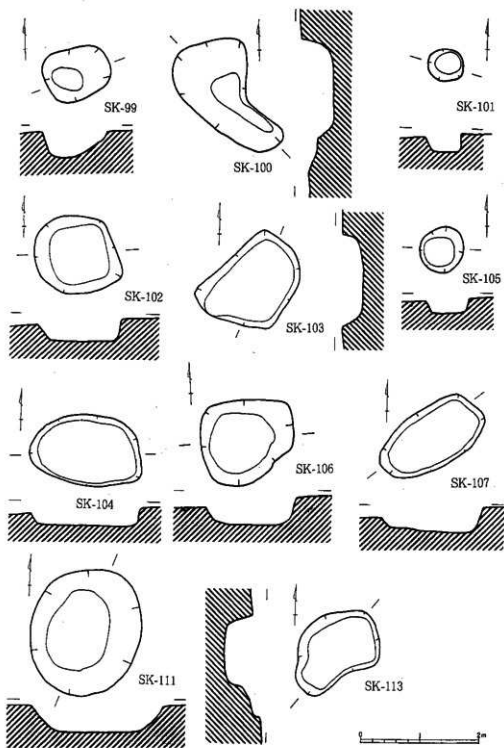




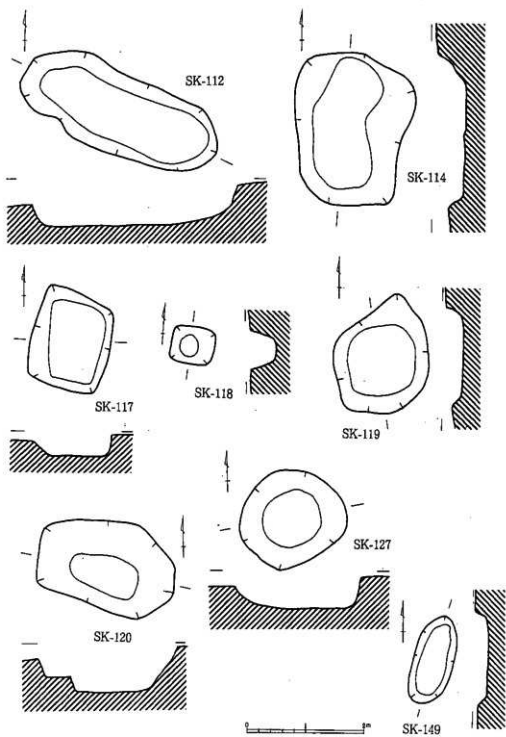
第20圖 土坑 (2)



第21圖 土坑 (3)



第22圖 土坑 (4)



第23圖 土坑 (5)

第3節 遺物

矢口遺跡からは、縄文時代早期末～前期初頭を中心とした遺物の出土がみられ、中期後葉～後期前葉の遺物も量的には少ないが出土している。

1. 遺構内出土土器

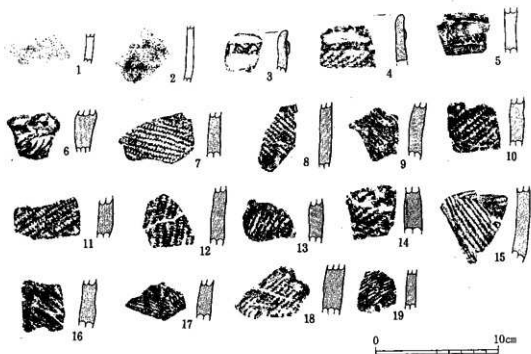
(1) 住居跡

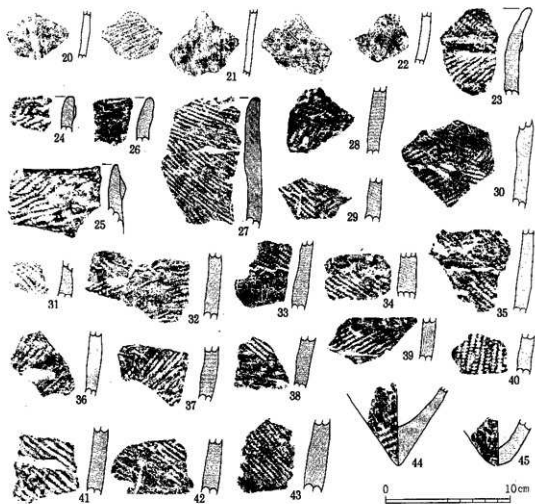
1号住居跡 (第24図)

縄文早期末～前期初頭の土器が出土している。

1・2は第Ⅰ群土器の胴部破片である。器厚は5mmと比較的薄く、焼成は良好であり、器面は無文で器内には指頭圧痕がみられる。3・4は第Ⅱ群土器の口縁部破片である。胎土に繊維を含み、口縁上部に隆帯の貼付がみられ、隆帯上には刻みを有する。5～19は第Ⅱ群土器の胴部破片である。5・6には刻みを有する隆帯がみられ、口縁部付近の破片であろう。6～19には縄文のみが施文され、羽状や菱形といったモチーフはみられない。

第24図 1号住居跡出土土器





第25図 2号住居跡出土土器(1)

2号住居跡(第25・26図)

縄文早期末～前期初頭の土器が出土している。

20～22は第Ⅰ群土器の胴部破片で、器面は無文であり、22を除いて器内に貝殻条痕調整がみられる。23～45は胎上に繊維を含んでいる。23～27は第Ⅱ群土器の口縁部破片である。23～25には降帯の貼付がみられ、23は外反する器形である。28～43は第Ⅱ群土器の胴部破片である。縄文原体のみを使用して施文がなされている。羽状構成をとるもの、結節がみられるものなどいくつかの施文方法のバリエーションがみられる。44・45は第Ⅱ群土器の底部である。尖底を呈し、45はやや丸みを帯びている。46～56は第Ⅱ群土器であり、襷糸施文がなされているものである。46・47は口縁部破片、48～56は胴部破片である。

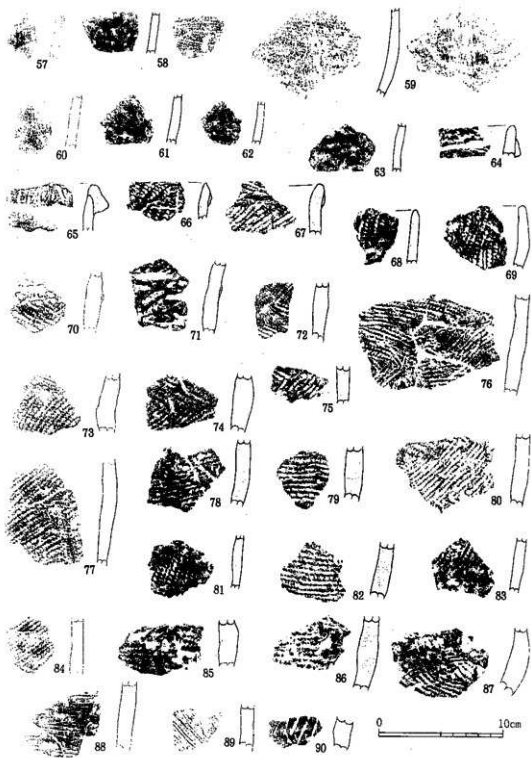


第26図 2号住居跡出土土器(2)

3号住居跡(第27・28図)

縄文早期末～前期初頭の土器が出土している。

57は第I群土器の口縁部破片であり、口縁上部に1条の隆帯がみられる。58～63は第I群土器の胴部破片である。58・59は器内に条痕が施され、60～63は無文である。64～69は第II群土器である。64～69は口縁部破片であり、64～67には隆帯が施されている。65は口縁上部に突起状の貼付がみられ、器面には撚糸文が施文されている。65以外は器面に縄文が施され、67は隆帯を挟んで羽状構成をとっている。70～90は胴部破片である。70・71には低い隆帯が施されている。共に縄文が施文され、70は羽状を描いている。72～87は縄文のみで文様が構成され、72～75は羽状構成をとっている。88～90は撚糸文が施文されている。91・92は底部破片であり、91は胴部から底部まで断片的に残っており、器面には縄文が施文されている。92は無文であるが、胎土に非常に多くの繊維を含んでいる影響からか器面及び器内は凹凸が激しい。



第27图 3号住居跡出土土器(1)

4号住居跡（第29・30図）

縄文早期末～前期初頭の土器が出土している。

93～105は第Ⅰ群土器である。93・94は条痕が波状を描くように施されている。95は口縁上部に隆帯が施され、隆帯上には貝殻条痕がみられる。96は貼り付けられていた隆帯が剥落した痕跡がわずかに残っている。98・102は器内に条痕調整がみられる。

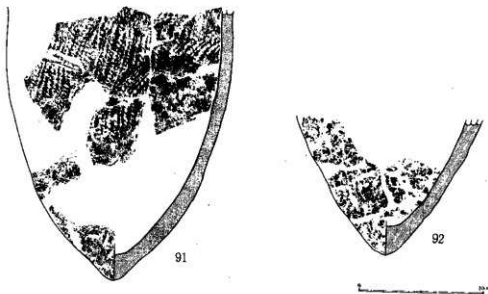
106～148は第Ⅱ群土器である。106～115は口縁部破片である。106～108は口縁上部に1条の隆帯が廻り、隆帯下には縄文が施文されている。116～148は胴部破片であり、116～143には器面に縄文が施文され、羽状構成をとっているものもみられる。144～148は燃糸文が施文され、2本揃いの燃糸を使用したものもみられる。

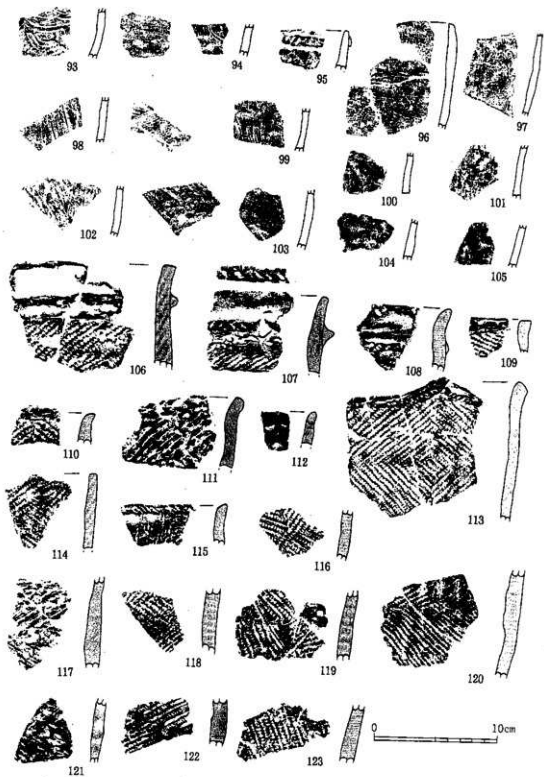
5号住居跡（第31図）

縄文早期末～前期初頭の土器が出土している。

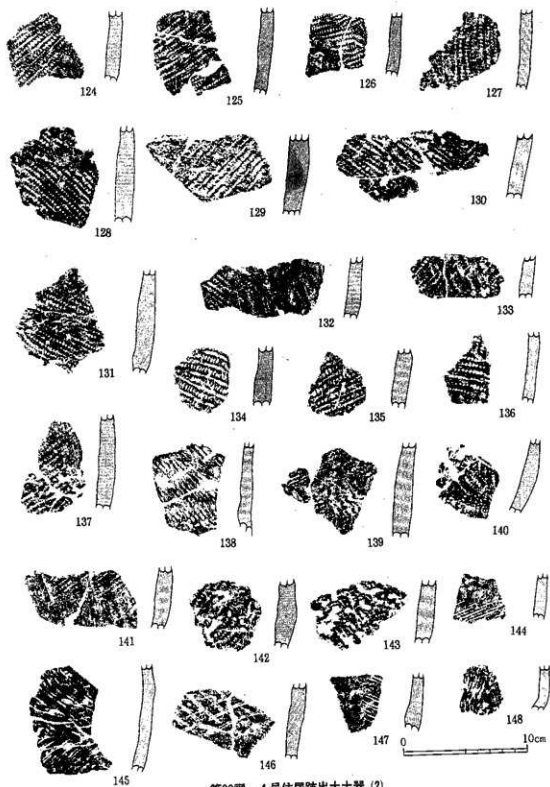
149～153は第Ⅰ群土器である。149・150は口縁部破片であり、149には口縁上部に断面が三角形を呈する隆帯がみられる。150は口縁上部に隆帯を貼り付け、隆帯上には貝殻条痕が施されている。151は貼付隆帯上に貝殻条痕が施文される。152は器内に条痕調整がみられる。154～177は第Ⅱ群土器である。154～158は口縁部破片であり、154・155・158には口縁に1条の隆帯が廻っている。154・155には縄文施文がみられ、158は燃糸文が施文されている。159～176は胴部破片であり、159～171・174・175は縄文のみで文様が構成され、結節縄文、羽状縄文などがみられる。172・173・176は燃糸文が施文されている。また、177は底部破片であるが燃糸文が施文されている。

第28図 3号住居跡出土土器(2)

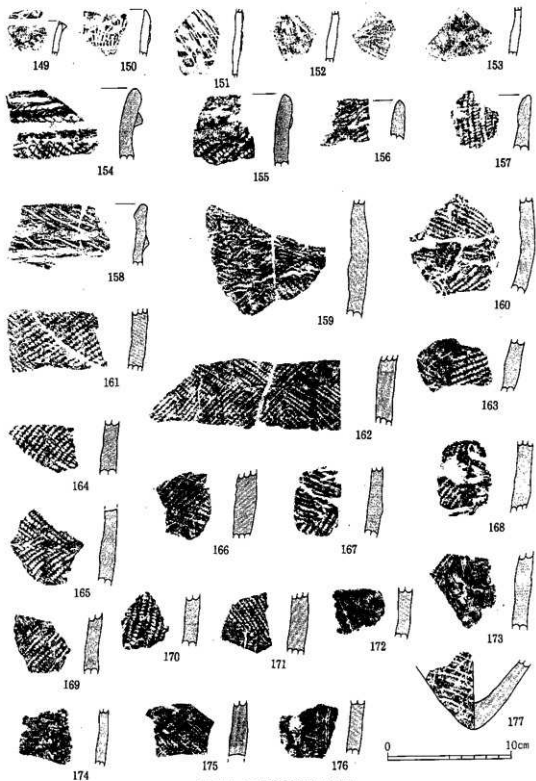




第29图 4号住居跡出土土器(1)



第30图 4号住居跡出土土器(2)



第31图 5号住居跡出土土器

6号住居跡

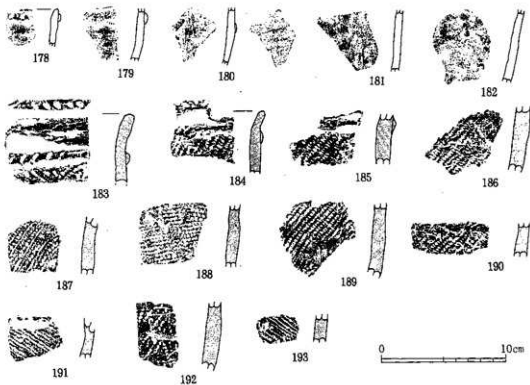
図示できる遺物は出土しなかった。

7号住居跡 (第32図)

縄文早期末～前期初頭の土器が出土している。

178～182は第I群土器である。178は口縁部破片であり、口縁上部に1条の隆帯が貼り付けられ、隆帯上および口唇に棒状工具によると思われる刻みがみられる。179～182は、胴部破片である。179・180は貼付隆帯をもち、179の隆帯上には櫛状工具による条痕が施されている。また、180の器内には貝殻条痕調整がみられる。183～193は第II群土器である。183・184は口縁部破片であり、やや外反する器形を呈している。口縁に平行に1条の隆帯の貼り付けがみられ、隆帯上に刻みが付けられている。また、口唇にも棒状工具による刻みがみられる。隆帯下には縄文が施されているが、隆帯から口唇の間は無文帯になっている。185～193は胴部破片であり、185には隆帯がみられる。183～190は縄文が施文され、187は付加条縄文が施文されている。191～193には燃糸文が施文される。191は2本揃いの燃糸文であり、192は燃糸が格子状に施文されている。

第32図 7号住居跡出土土器

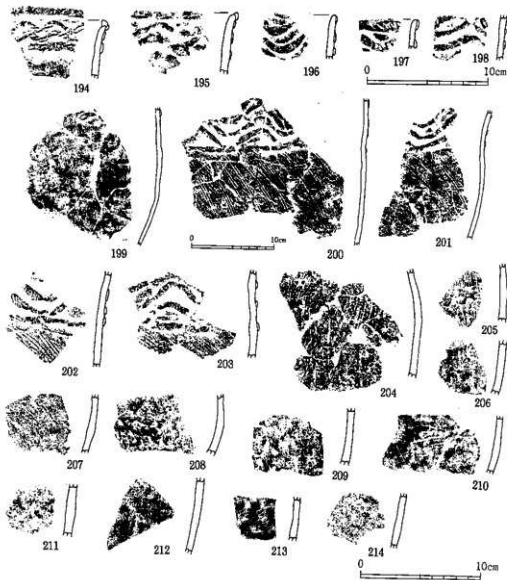


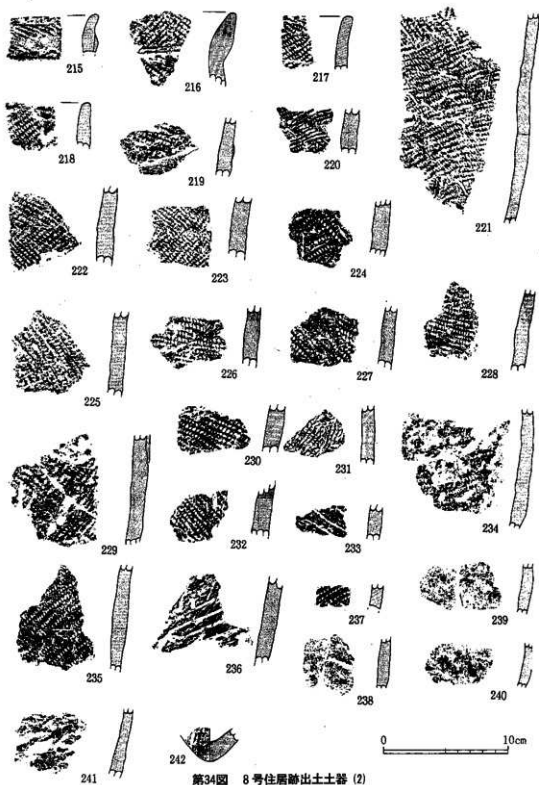
8号住居跡 (第33・34図)

縄文早期末～前期初頭の土器が出上している。

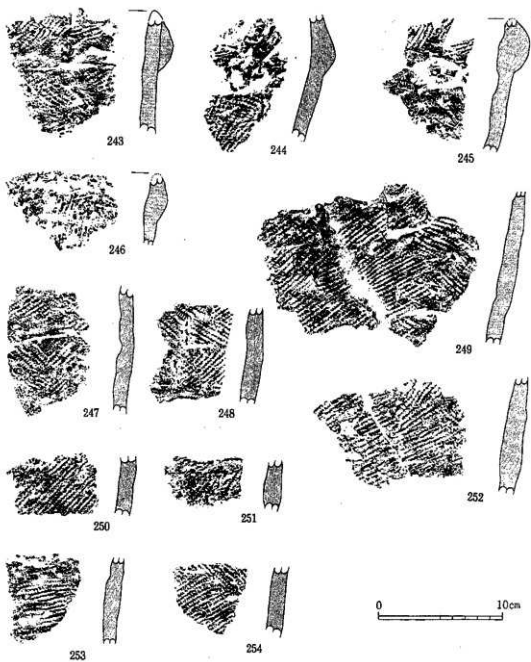
194～214は第Ⅰ群土器である。194～197は口縁部破片である。194・195は隆帯上に貝殻背圧痕文が施文され、196・197には隆帯上に貝殻条痕文が施されている。198～214は胴部破片である。199には隆帯がみられ、隆帯上に貝殻背圧痕文が施されている。198・200～203は隆帯上に貝殻条痕文が施文され、200～203には隆帯下にも貝殻条痕文が施されている。204～214は無文である。215～242は第Ⅱ群土器である。215～218は口縁部破片であり、215には隆帯の貼り付けがみられ、216はやや外反する器形を呈し、肥厚口縁を有している。221～241は胴部破片であり縄文を中心に施文がなされ、236・237のような垂糸文もみられる。

第33図 8号住居跡出土土器 (1)





第34图 8号住居跡出土土器(2)



第36图 9号住居跡出土土器

9号住居跡（第35図）

縄文前期初頭の土器が出土している。

243～254は第Ⅱ群土器である。243～246は口縁部破片であるが、口唇部が欠落している。口縁部が賑らんでいる肥厚口縁を呈しており、おそらく4単位の波状口縁を有するものと思われ器面には縄文が施文され、243～245は羽状構成をとっている。249～254は胴部破片であり、縄文のみで文様が構成されている。247・248・254は羽状縄文が施されている。これらの土器は他住居出土土器に比べ焼成が不良で非常に脆くなっている。

10号住居跡（第36図）

縄文前期初頭の土器が出土している。

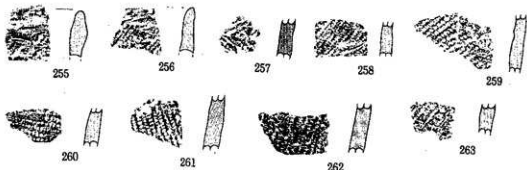
255～266は第Ⅱ群土器である。255・256は口縁部破片であり、255は肥厚口縁を有している。257～263は胴部破片であり、縄文のみ施文され、257はやや不明瞭ながら羽状縄文がみられる。

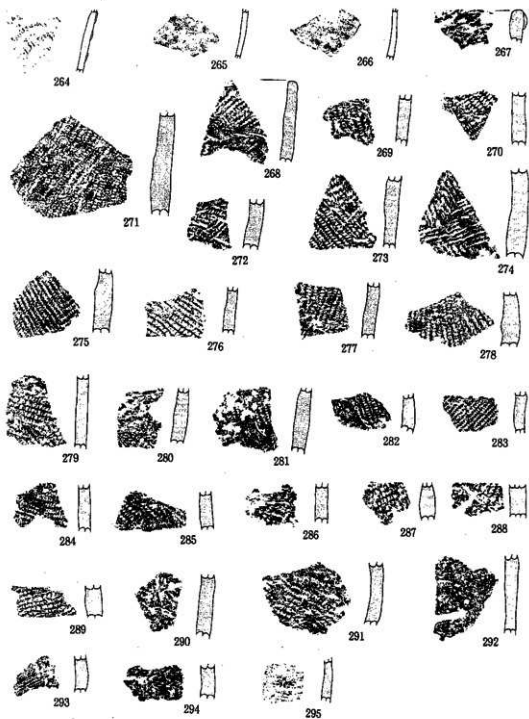
11号住居跡（第37図）

縄文早期末～前期初頭の土器が出土している。

264～266は第Ⅰ群土器である。264は貼り付けられた隆帯上に貝殻条痕文が施されている。265・266は無文であり、器内には指頭圧痕がみられる。267～295は第Ⅱ群土器である。267・268・266は口縁部破片で、267には口唇直下に隆帯がみられ、また268には結節縄文が施文されている。269～295は胴部破片であり、269～291には縄文が施文されている。269・270・272～275は羽状構成をとっているが、全体的に乱雑な施文である。292は無文で、293～295は燃糸文が施文されている。

第36図 10号住居跡出土土器





0 10cm

第37图 11号住居跡出土土器

12号住居跡

図示できるような遺物は出土しなかった。

13号住居跡

図示できるような遺物は出土しなかった。

14号住居跡（第38図）

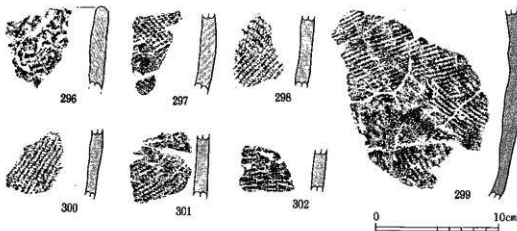
縄文前期初頭の土器が出土した。

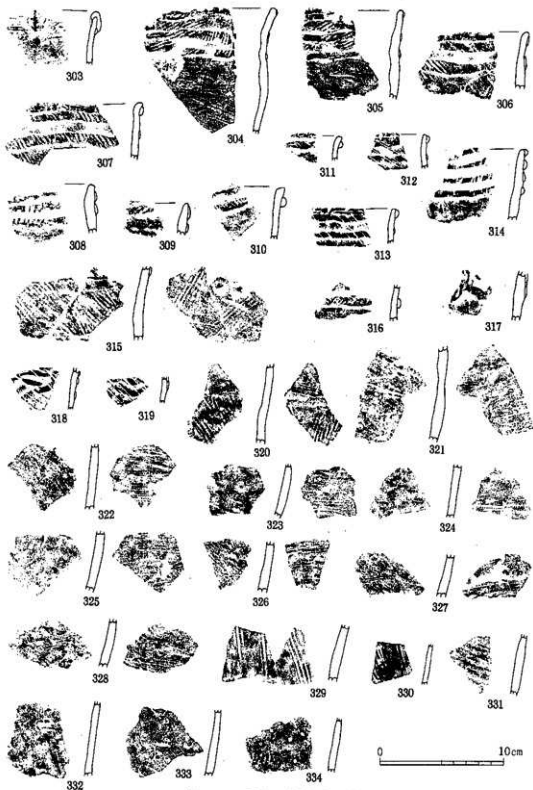
296～299は第Ⅱ群土器である。296は口縁部破片で隆帯や肥厚はみられず、ほぼ直に立ち上がっている。縄文が施文されているが、器面が荒れているため不明瞭である。297～302は胴部破片である。縄文のみで文様構成がなされており、298は羽構成をとっている。

15号住居跡（第39～41図）

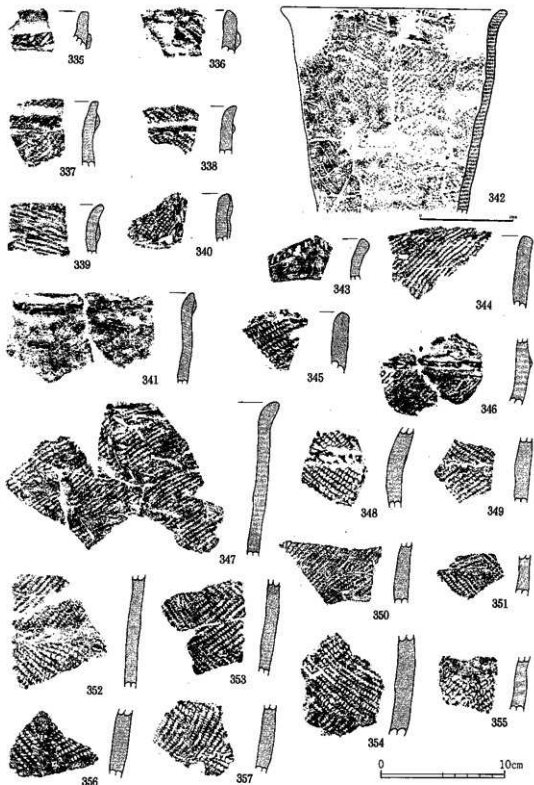
本遺跡の中でも遺物量が多かった住居であり、縄文早期末～前期初頭の土器が出土した。303～334は第Ⅰ群の土器である。303～314は口縁部破片で、303は口縁上部に1条の隆帯が廻り、縦位に突起状に隆帯が貼り付けられており、隆帯上及び器面には縄文などの施文はみられない。関東系の土器であると考えられる。304～309には2～3条の隆帯が貼り付けられ、隆帯上には貝殻条痕文が施文されている。310～314には1～4条の隆帯がみられ、隆帯上に櫛条痕が施されている。315～334は胴部破片である。315は隆帯が貼り付けられ器内外に条痕がみられる。316・317は隆帯上に貝殻条痕が施文され、318・319には櫛条痕がみられる。320～328は器内にも条痕調整がみられ、332は無文であるが隆帯を貼りつけた痕跡がみられる。

第38図 14号住居跡出土土器

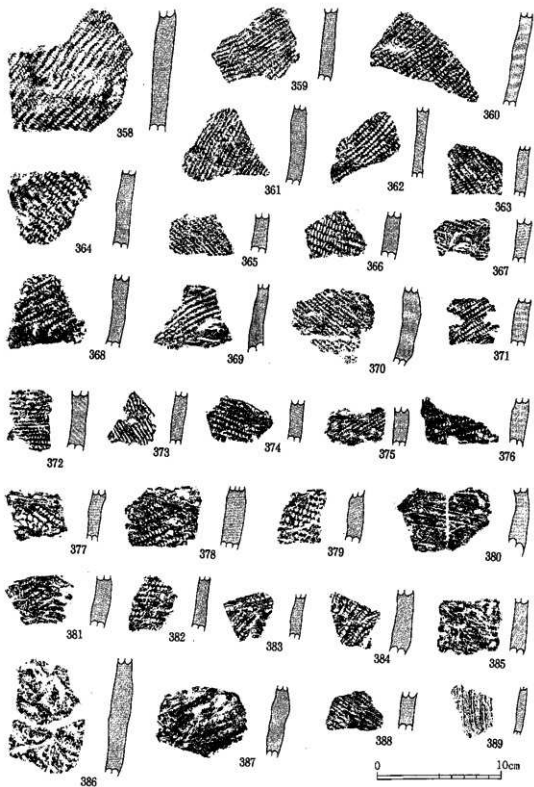




第39图 15号住居跡出土土器(1)



第40图 15号住居跡出土土器 (2)



第41图 15号住居跡出土土器 (3)

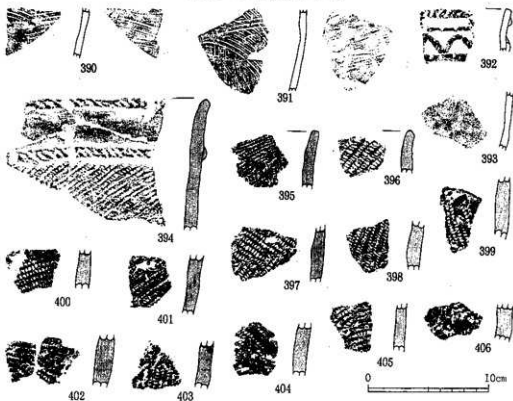
335～389は第Ⅱ群土器である。335～346は口縁部破片である。335～341は隆帯が貼り付けられており、340は波状口縁を有する器形を呈しており、波頂部から隆帯が垂下し横走する隆帯に接続している。他は1条の隆帯が口縁に平行するように廻っている。器面には縄文が施文されているが、339は無文である。342はやや外反する器形を呈し、胴上半部が残存している。15号住居跡の床面から直立するような形で出土した土器で、本址の時期決定をするうえで重要な土器である。器面には縄文が施文されているが、羽状や菱形といった施文構成はみられない。343は口唇に刻みを有し、やや外反する器形をとり、器面は無文である。347～389は胴部破片である。347・348は隆帯が貼り付けられているが、隆帯は低い。349～357は羽状縄文が施文されている。358～384は単筋縄文が施文され、385～387は無文である。388・389は2本指いの燃糸文が施文されている。

16号住居跡 (第42図)

縄文早期末～前期初頭の土器が出土している。

390～393は第Ⅰ群土器であり、390・391の器面には沈線が弧を描くように施文され、器内には条痕調整がみられる。392は口唇に刻みを有し、器面には隆帯が貼り付けられ、隆帯上に貝殻背圧痕文が施文されている。394～406は第Ⅱ群土器である。394は口唇に刻みを有し、刻みをもつ隆帯が1条横走している。口唇と隆帯の間は無文帯になっている。397～406は胴部破片であり、縄文が施文されている。

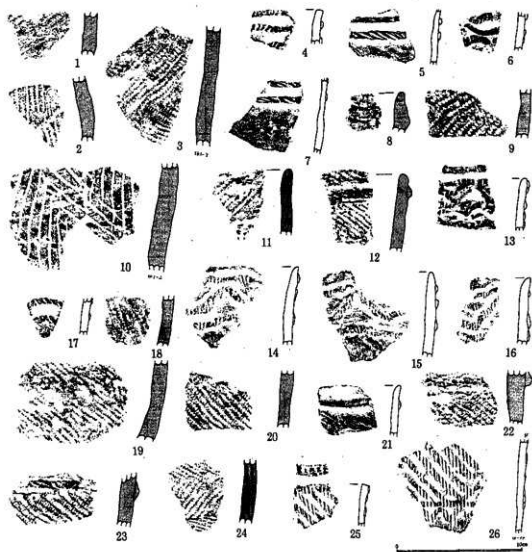
第42図 16号住居跡出土土器

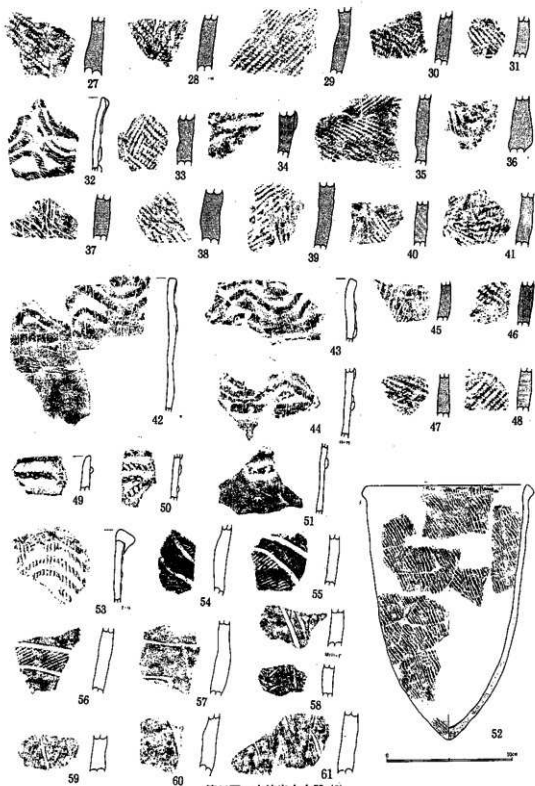


(2) 土坑

検出された143基の土坑の約半数の土坑から遺物が出土している。ここではその一部分を図示した。土器の出土の状況を見ると、住居跡周辺の土坑からは住居と同時期の縄文早期末～前期初頭の遺物が出土し、調査区下半部の土坑からは縄文中・後期の土器が出土する傾向がみられる。住居跡でもみられたが、早期末の東海系土器と前期初頭の縄文系土器が共伴している土坑もみられた。本文では縄文中・後期の土器についてあまり触れていないが、これらの土器は過去の調査時にも確認されており該期の土坑群として捉えていく必要がある。

第43図 土坑出土土器 (1)





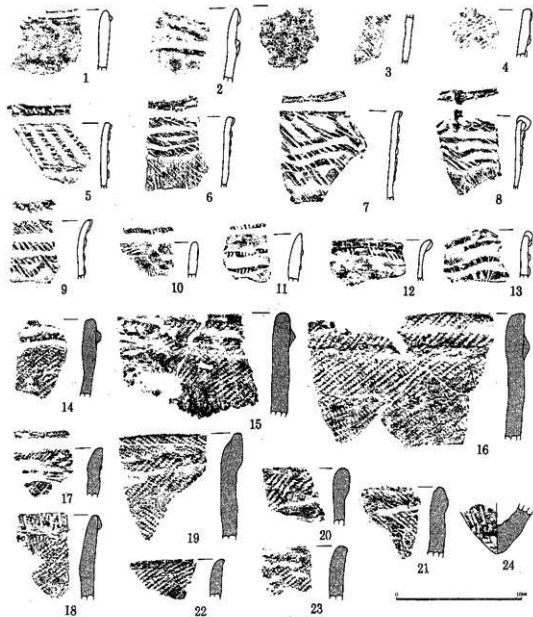
第44图 土坑出土土器 (2)

2. 遺構外出土土器

1～13は第Ⅰ群土器であり、14～24は第Ⅱ群土器である。

縄文早期末～前期初頭を中心として多量の土器が出土している。ここで図示したものは全体のほんの一部である。早期末の東海系土器は塩屋式が中心で僅かながら天神山式土器もみられる。一方関東系の土器は隆帯文系の神之木台式がみられるが全体で10点にも満たない。また、縄文前期初頭に位置付けられている縄文系土器も出土しており、これは本遺跡の主体を占めている。しかし、前期初頭に続く土器はみられず、次の土器が出現するのは縄文中期後葉になってからである。

第45図 遺構外出土土器



3. 出土石器

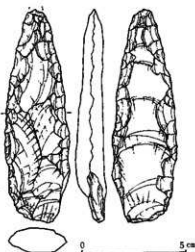
矢口遺跡からは、旧石器～縄文時代の石器の出土がみられた。旧石器時代の石器は、遺構外から出土した槍先形尖頭器1点のみである。先端部が僅かに欠損しているが、長さ10.3cm、幅3.1cm、厚さ1.4cmの安山岩製である。

縄文時代の石器は多数出土しており、大部分が早期末～前期初頭の石器と考えられる。住居内から出土した石器をみると凹石、磨石、特殊磨石、敲石などがその中心を占めている。また、特殊磨石と凹石、敲石と凹石というように転用されている石器が多数みられるという特徴がみられるなど、該期の石器組成を考えるうえで貴重な資料となるであろう。

第2表に住居跡から出土した石器の一覧を示したが、この表に掲載されていない石器もまだ

残されており、石鏃や石匙なども数的には少ないが出土していることは述べておきたい。頁数の都合上、これら遺構内出土石器の詳細及び遺構外を含めた矢口遺跡の石器の様相については別の機会を設け、改めて述べていくことにしたい。

第46図 槍先形尖頭器



番号	発掘区	種別	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴
1	1住	石皿	細粒砂岩	330	55	20	2,250	
2	"	特殊磨石	安山岩	80	80	35	420	
3	"	特殊磨石・凹石	細粒砂岩	50	80	30	380	
4	2住	横刃形石器	頁岩	53	40	10	45	
5	"	礫器	中粒砂岩	90	50	20	125	
6	"	"	チャート	130	65	30	380	
7	"	特殊磨石	細粒砂岩	135	70	20	520	
8	"	敲石・凹石	硬砂岩	170	40	20	410	
9	"	敲石	"	153	35	16	180	
10	"	特殊磨石	細粒砂岩	90	73	55	430	
11	"	横刃形石器	頁岩	78	35	10	43	
12	"	"	"	60	50	12	65	
13	"	敲石・凹石	中粒砂岩	165	40	30	310	
14	"	特殊磨石	細粒砂岩	185	90	20	810	
15	4住	磨石	粗粒凝灰岩	110	90	30	610	
16	"	特殊磨石	"	55	110	40	320	
17	"	磨石	"	108	90	25	500	

番号	発掘区	種 別	石 質	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	特 徴
18	4住	敲 石	粗粒凝灰岩	150	45	30	310	
19	"	磨 石	"	106	86	33	540	
20	"	敲石・凹石	"	150	60	25	330	
21	"	凹 石	"	65	53	30	190	
22	"	横刃形石器	頁 岩	95	37	5	38	
23	"	"	細粒砂岩	75	40	10	43	
24	5住	凹石・磨石	レキ岩	114	93	35	650	
25	"	"	粗粒凝灰岩	100	90	20	450	
26	"	磨製石斧	細粒砂岩	88	45	15	160	
27	"	磨石・凹石	中粒砂岩	80	60	20	210	
28	"	横刃形石器	頁 岩	80	30	10	30	
29	8住	砥 石	粗粒砂岩	240	200	110	2,840	
30	"	不定形石器	細粒砂岩	75	70	20	100	
31	"	凹 石	"	54	47	24	110	
32	"	横刃形石器	頁 岩	80	30	14	60	
33	"	不定形石器	硬砂岩	43	28	8	25	
34	9住	磨石・凹石	中粒砂岩	110	90	34	490	
35	"	横刃形石器	頁 岩	64	43	5	30	
36	14住	凹 石	安山岩	95	48	30	175	
37	15住	板状石皿	中粒砂岩	140	90	50	890	
38	"	"	"	187	55	25	440	
39	"	凹 石	"	250	105	40	710	
40	"	凹石・特殊磨石	硬砂岩	65	80	28	250	
41	"	敲石・凹石	"	148	45	20	220	
42	"	"	中粒砂岩	30	55	33	99	
43	16住	特殊磨石・凹石	粗粒凝灰岩	110	90	25	620	
44	"	砥 石	細粒砂岩	100	105	80	530	
45	"	敲 石	"	128	38	30	280	

第2表 住居跡内出土石器一覧表

第三章 唐沢南遺跡の調査

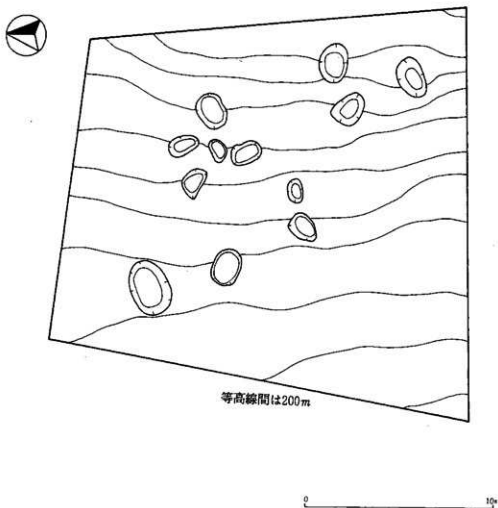
第1節 調査の概要

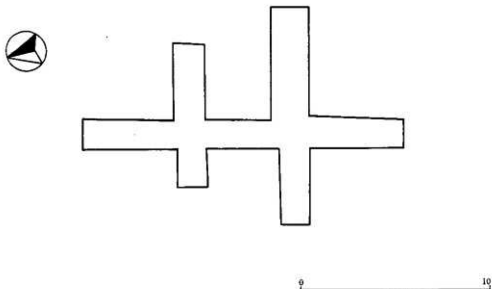
唐沢南遺跡は矢口遺跡同様、長野県総合教育センター建設工事に伴い発掘調査が行われた。本遺跡が位置する地点は山林の中にあり当初遺跡の存在は確認されていなかったが、試掘調査の結果遺跡が存在することが判明し、今回の調査にいたった。

調査は発掘地点が2箇所にわたるため、I区とII区とに分けそれぞれ調査を行った。

調査の結果、I区から縄文時代中期のものと思われる土坑が12基確認され、それに伴い縄文時代の土器石器が量的に少ないが出土している。

第47図 唐沢南遺跡I区全体図





第48図 唐沢遺跡Ⅱ区全体図

第2節 遺構

I区

I区からは縄文時代中期に該当すると思われる12基の土坑が検出されたが、遺構内からは遺物の出土はみられなかった。

検出された土坑はローム層に掘り込まれており、大部分がタライ状を呈していた。最も大きな土坑は長軸2.9m、幅2mもあった。全体的に土坑の掘り込みは浅く、30cm程度のものが中心であった。

Ⅱ区

幅約1.5mのトレンチを十字に入れ調査を行ったが、遺構は検出されなかった。

第3節 遺物

I区

遺構内からの遺物の出土はなく、全て遺構外からの出土であった。

土器は23点出土したが、それらの土器のほとんどは縄文時代中期後半の土器であった。石器は打製石斧3点、横刃形石器1点、剥片石器1点の合計5点が出土し、打製石斧は撥形と短冊形の2種類がみられた。石器以外には黒曜石の破片も出土している。また、時代は全く異なるが寛永通宝も1枚出土している。

Ⅱ区

遺物の出土はみられなかった。

第IV章 考 察

1. 矢口遺跡出土の土器について

(1) 土器分類

矢口遺跡からは、縄文時代早期末～後期初頭の土器が出土している。その主体となるものは早期末～前期初頭の土器群であり、矢口遺跡から検出されている住居跡はこれらの時期に比定されると考えられ、これらの土器がもつ意味は重要である。

以下、時間軸により群を大別し、文様構成などにより、ここでは本遺跡の主体となる縄文早・前期について類別していく。なお、文中の()内の番号は住居跡出土土器のものとする。

第Ⅰ群土器 縄文時代早期末葉～前期初頭の関東系及び東海系土器を主体とする。

第Ⅱ群土器 縄文時代前期初頭の縄文系土器を主体とする。

第Ⅲ群土器 縄文時代中期の土器を主体とする。

第Ⅳ群土器 縄文時代後期の土器を主体とする。

第Ⅰ群1類 関東の隆帯文系土器を一括する。(神之木台式)

a種 口縁部下に貼付隆帯をもち、隆帯上にキザミが施されるもの。

5号住居跡(149)から出土している。

b種 口縁部下に貼付隆帯をもつが、隆帯上にキザミ等の施文がなされないもの。

15号住居跡(303)にみられる。

第Ⅰ群2類 貝殻を使用し波状をモチーフに描くもの。(天神山式)

4号住居跡(93・94)と16号住居跡(391・392)から出土している。94以外には器内に条痕文調整がみられる。器厚は5mm前後と薄手で焼成は堅緻である。

第Ⅰ群3類 東海条痕文系土器の塩屋式の範疇にふくまれるもの。

a種 口縁部下に隆帯をもち、隆帯上に貝殻背圧痕文を施すもの。

8号住(194・195・199)、16号住(392)から出土している。

b種 口縁部下に隆帯をもち、隆帯上に貝殻腹縁文を施すもの。

住居跡内からの出土はみられなかったが、遺構外より2点確認されている。これらは土器の胎土からみて東海地方から搬入されたものと考えられる。

c種 口縁部下に隆帯をもち、隆帯上に貝殻条痕文を施すもの。

4号住(95)、5号住(150・151)、8号住(196～198、200～203)、11号住(264)、15号住(304～309、315～317)から出土している。

d種 口縁部下に隆帯をもち、隆帯上に棒状工具による条痕文が施文されるもの。

7号住(179・180)、15号住(309～313、318・319)にみられる。

e種 口縁部下に隆帯をもち、隆帯上に棒状工具による刻みが施されるもの。

3号住 (57)、7号住 (178) にみられる。

第Ⅰ群4類 無文・擦痕土器を一括する。

a種 器内に条痕調整を有するもの。

2号住 (20・21)、3号住 (58・59)、4号住 (98・102)、5号住 (152)、15号住 (320～328) から出土している。

b種 器内に条痕調整がみられないもの。

1号住 (1・2)、2号住 (22)、3号住 (60～63)、4号住 (98～101、103～105)、5号住 (153)、7号住 (181・182)、8号住 (204～214)、11号住 (265・266)、15号住 (329～334)、16号住 (393) から出土している。

第Ⅱ群1類 口縁部下に隆帯をもつもの。

a種 口唇に刻みを有するもの。

4号住 (107)、7号住 (183・184)、16号住 (394) にみられる。

b種 口唇に刻みがみられないもの。

1号住 (3・4)、2号住 (23・24)、3号住 (64・66・67)、4号住 (106・108)、5号住 (154・155)、8号住 (215)、11号住 (267)、15号住 (335～341) から出土している。

これらの中には、隆帯に刻みを有するもの、隆帯を挟んで縄文が羽状構成をとっているものなどいくつものバリエーションがみられ、さらに細分が可能である。

第Ⅱ群2類 口縁が肥厚するもの。

3号住 (65)、8号住 (216)、9号住 (243～246)、10号住 (255) にみられる。3号住から出土している65は、隆帯から肥厚口縁へと変化する過程のものと考えられる。

第Ⅱ群3類 口縁部に隆帯も肥厚もみられないもの。

2号住 (26・27)、3号住 (78・79)、4号住 (109～114)、5号住 (156・157)、8号住 (217・218)、10号住 (256)、11号住 (268)、14号住 (296)、15号住 (342～346)、16号住 (395～396) から出土している。口縁が外反するものと直に立ち上がるものとに大別され、稀に口唇に刻みを有するものもみられる。

第Ⅱ群4類 縄文のみ施文されるもの。

a種 無節

b種 単節

c種 同一原体による羽状縄文

d種 異原体による羽状縄文

e種 付加条縄文

このように縄文原体によっていくつかに分類することができる。このうち単節の斜縄文が最も多く、無節はほとんどみられない。付加条縄文も量的には少ないが確認された。羽状縄文は比較

の多くみられるが、それら全てが羽状構成を意識して施文されているとは考えにくく、縄文施文の過程で偶然羽状らしき縄文になったものもあると思われる。羽状縄文に使用されている原体は、同一原体よりも異原体の割合が多い傾向がみられる。

第Ⅱ群5類 撚糸文が施文されるもの。

2号住(46~56)、3号住(88~90)、4号住(115・144~148)、5号住(158・172・173・176・177)、7号住(191~193)、8号住(236~237)、11号住(293~295)、15号住(388・389)から出土している。1本の縄を使用したものと、2本揃いの縄を使用したものとの2種類がみられ、撚糸の施文方向を変え格子状に施文しているものもみられる。

(2) 縄文時代前期初頭の土器変遷

矢口遺跡から出土した縄文前期初頭縄文系土器についてみていくと、大きく3段階に分けることができ、土器分類でみていくと第Ⅱ群1~3類にほぼ該当する。以下段階ごとに特徴を述べていく。

第Ⅰ段階(塚田式)

胎土に多量の繊維を含み、器形は平縁及び波状口縁を有する尖底の深鉢形を呈する。口縁部に隆帯が1条横走するものと、波状口縁の波頂部から隆帯が垂下するものとがみられる。また、口唇と隆帯との間に施文がなされない口縁部無文帯を有するものもみられる。無文帯をもたないものでは、隆帯を境に縄文を羽状に施文するものもある。口唇部に棒状工具によると思われる刻みを有するものもある。

第Ⅱ段階(中道式)

平縁及び波状口縁を呈する尖底土器で胎土に多量の繊維を含んでいる。Ⅰ段階にみられた隆帯は無くなり、肥厚口縁へと変化している。前段階にみられた口唇の刻みはほとんど無くなり、器面全体に縄文が施文され羽状を描くものも多くみられる。しかし、羽状は整然と描かれているという感じをあまり受けない。

第Ⅲ段階

胎土に多量の繊維を含み、器形は平縁及び波状口縁を有する尖底の深鉢形土器である。Ⅱ段階の肥厚口縁は消失している。稀に口唇に刻みを有するものがあるが、ほとんどの口唇は無文になっている。器面に施文されている縄文も羽状構成をとるものは少なく、単節斜縄文が中心になっている。

Ⅰ段階にみられる隆帯は、比較的高いものと低いものとに分けられ、高い隆帯は低い隆帯を有するものに比べ口唇との間隔が広くなる傾向がみられ、段階が進むにつれ口唇に近づいていくと思われる。Ⅰ段階の中でも古手と思われる土器の口唇には棒状工具などによる刻みがしばしばみ

られる。また、隆帯上部には最初無文帯がみられるが隆帯が低くなり位置が上昇するにつれ、縄文などが施文されるようになる。

口唇付近にみられるようになった隆帯はⅡ段階になると肥厚口縁へとその形を変えていく。Ⅱ段階の終わりには肥厚していた口縁も無くなり、肥厚に変わって口縁が外反する器形を呈するようになる。

Ⅲ段階では、肥厚口縁も外反していた器形の土器もなくなり、口縁部は垂直に近い立ち上がりを呈するようになる。

2. 矢口遺跡の位置付け

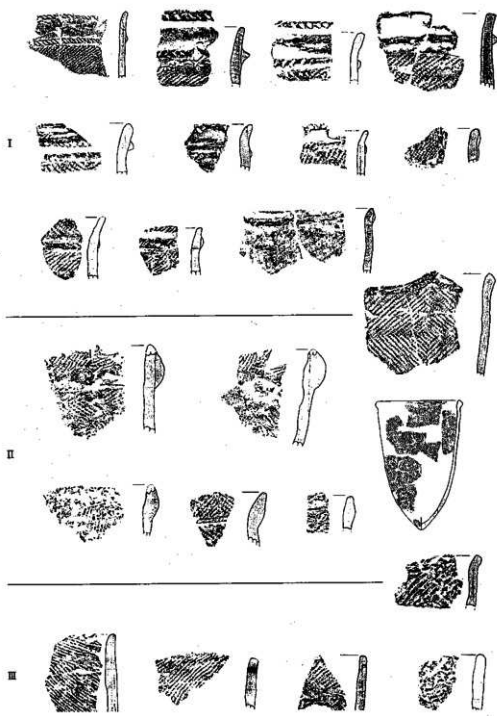
長野県内において縄文前期初頭縄文系土器が出土している遺跡をみると、遺跡数及び出土量において東信地方が優位を誇っており、「中道式」の標識遺跡である中道遺跡や「塚田式」（平成6年2月の縄文セミナーの席上で下平博行、賛田明両氏により提唱された）の標識遺跡である塚田遺跡などが位置している。矢口遺跡が位置する中信地方において該期の遺物の出土している遺跡は僅かである。このような状況の中、矢口遺跡で縄文早期末～前期初頭の土器が共伴関係で出土していることは、県内でも明確な事例は少なく貴重な発見と言え、現在前期初頭の縄文系土器の位置付けについて所説があるなかで、東海条痕文系土器との関係からより一層の研究が行われることと思われる。

矢口遺跡から出土している土器は、県内出土の他の土器と比べ胎土及び焼成は全体的に良好ではなく、特に早期末の東海系の土器は中心地であろう東海地方の土器に比べ脆弱なつくりをしており、これは中心地から離れているため在地的要素を多く含んでいるためであると考えられる。

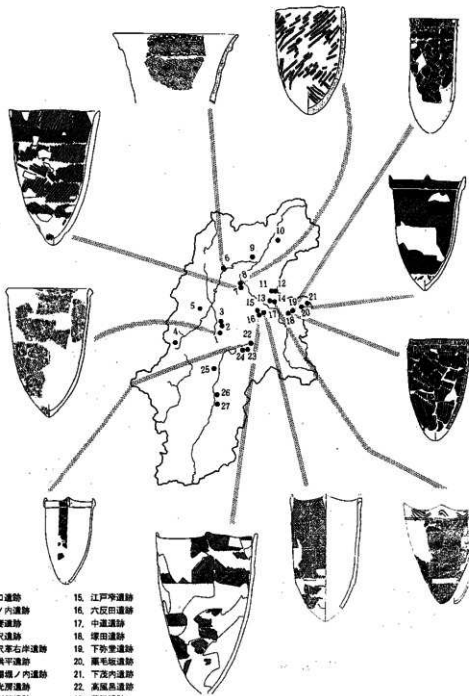
前期縄文系土器についても同様のことが言え、群馬県や東信地方の土器と比べると粗いつくりをしている。

遺構として住居後が16軒検出され、しかも縄文早期末～前期初頭という限られた時期に構築され、土坑を有する広場を取り巻くように住居跡が配置されている。早期末～前期初頭という縄文時代でも比較的古い時期であり、集落研究の観点からみても確立期の集落の解明に役立つものと思われる。

いずれにしても、これらの発掘成果を生かした研究がこれからの課題として残された。



第49圖 縄文前期初頭縄文系土器変遷図



- | | |
|-------------|------------|
| 1. 矢口遺跡 | 15. 江戸塚遺跡 |
| 2. 坪ノ内遺跡 | 16. 六反田遺跡 |
| 3. 生妻遺跡 | 17. 中道遺跡 |
| 4. 位沢遺跡 | 18. 塚田遺跡 |
| 5. 黒沢平右岸遺跡 | 19. 下外堂遺跡 |
| 6. お供平遺跡 | 20. 黒毛板遺跡 |
| 7. 羽塚遺跡ノ内遺跡 | 21. 下茂内遺跡 |
| 8. 丹光原遺跡 | 22. 高風原遺跡 |
| 9. 浅川端遺跡 | 23. 芥沢遺跡 |
| 10. 田家川尻遺跡 | 24. 天狗山遺跡 |
| 11. 四日市遺跡 | 25. 北高根A遺跡 |
| 12. 真田代館跡 | 26. 中越遺跡 |
| 13. 真行寺遺跡 | 27. 殿村遺跡 |
| 14. 巖寺屋遺跡 | |

第50図 縄文前期初頭主要遺跡分布図

第V章 ま と め

塩尻市の東方、筑摩山地山麓の片丘地区は全国的にも著名な遺跡の密集地帯であるが、この一角、片丘南内田に長野県総合教育センターが建設されることになった。用地内には山林や畑地が含まれており遺跡の存在が今まで確認できていなかったため事前の確認発掘調査が実施され、矢口・唐沢南の二遺跡の存在が確認された。山林内でのこうした確認調査は市内では初の試みであり今後の遺跡の調査・保護の指標となろう。

確認された矢口・唐沢南の二遺跡は事前の緊急発掘調査が実施され大きな成果を得ることができた。

矢口遺跡は6,000㎡にわたって発掘調査が実施され、旧石器時代から縄文時代後期にかけての遺構・遺物が発見された。旧石器時代末の槍先形尖頭器や縄文時代中期・後期の土器を内包する土坑など注目すべき発見もあるが、とりわけ縄文時代早期末から前期初頭（塚田式・中道式期）にかけての集落址がほぼ露呈できたことは大きな成果として注目される。

早期末から前期初頭にかけての住居址は16軒が、およそ30mの中央広場と考えられる空間を取り巻くように配列した環状集落の形態をなして発見された。縄文時代に特徴的な環状集落は前期に入ってから確立するというのが従来までの定説であったが、今回の矢口遺跡での発見によってその確立は遅くとも早期末から前期初頭にはなされていたことが証明されたといえる。そして、昨年の上松町でのお宮の森遺跡の発見によってその出現はさらに縄文時代創草期にまでさかのぼることが明らかとなってきている。縄文時代集落確立期の実態解明はここ数年で大きく前進したが、その中で矢口遺跡での成果は重要であり、縄文時代の集落址研究に果たす役割は極めて大きい。また、出土した多量の土器は未確立であった塚田式・中道式の土器編年に住居址単位で把握された基礎的資料を提供し、磨石・蔽石・板状石皿主体の石器類もこの時期の石器の実態を把握する上で貴重な資料となろう。

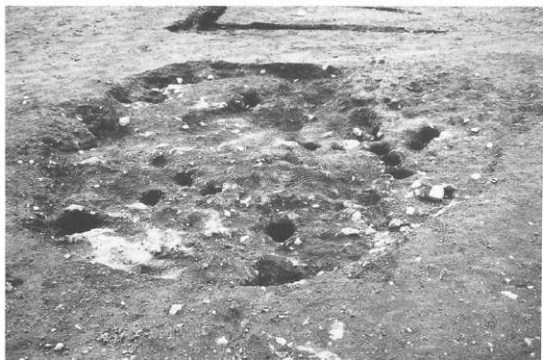
唐沢南遺跡は発見された遺構・遺物とも量的には少なかったものの、標高800mを越える高所にも遺跡が存在することが確認された意義は大きく、今後、この地域の遺跡分布を考える上で参考になる面が多い。

以上のような成果をあげることができたのも偏に長野県教育委員会・長野県土地開発公社および地元の関係者の方々ならびに発掘に携わっていただいた方々の深いご理解とご協力の賜物であり、ここに衷心より感謝申し上げます。

矢口遺跡



矢口遺跡全景（南から）



第1・12号住居址



第2号住居址



第7号住居跡



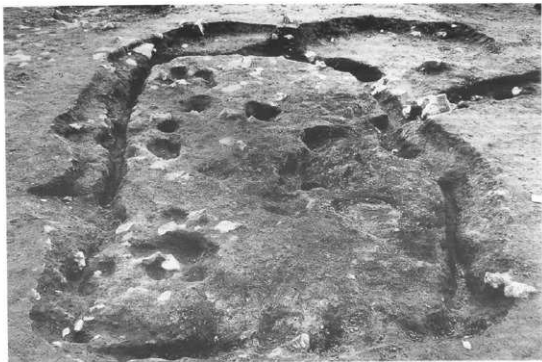
第9号住居跡調査状況



第10号住居跡



第11号住居跡



第14号住居跡

第14号住居跡
黒曜石出土状況





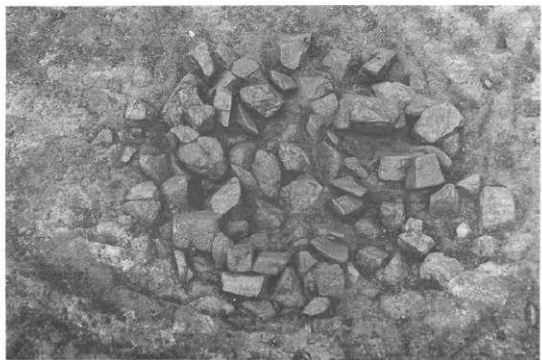
第8・15号住居跡



第15号住居跡
床面直上土器出土状況



第16号住居跡



1号集石炉



住居跡内出土石器 (1)



住居跡内出土石器 (2)

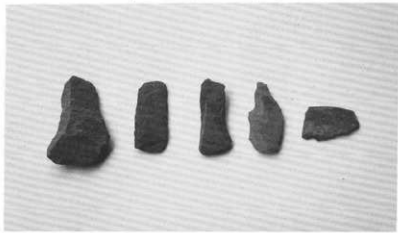
唐 沢 南 遺 跡



唐沢南遺跡 I 区全景



II区全景



I区出土土器

— 矢口・唐沢南遺跡発掘調査報告書 —

平成6年3月25日 印刷

平成6年3月30日 発行

発行者 長野県塩尻市教育委員会

印刷所 クマガイ印刷

